

婦人子ども



大正四年三月十日

第十五卷  
第三號



フレイベル會

第十五卷第三號目次

幼稚園を修了する幼児達に

幼児保育の方針に就て

ピップの話

うさぎ

フレールベル追懷録

小西 重直

岡田 みつ

岡崎町幼稚園

本誌定價

一冊 郵税共金拾壹錢 六冊前金郵税共六拾錢  
拾二冊同金壹圓貳拾錢 郵券代用 一割増

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ  
込み下さい。直に送本致します。(振替口座東京一七二六六  
番)

本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます

(庶務上保姆紹介に關する件をも含む)の御手紙は  
東京市小石川區久堅町七十四番地フレールベル會事  
務所宛

會計事務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内、  
雨森劍宛

本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下代々  
木山谷一二四倉橋惣三宛

大正四年三月五日印刷  
大正四年三月十日發行

東京府豊多摩郡代々幡村大字代々木山谷一二四  
編輯兼發行者 倉 橋 惣 三

印刷者 東京市本所區番場町四番地 登

印刷所 東京市本所區番場町四番地  
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 東京市小石川區久堅町七十四番地  
フレールベル會

東京女子高等  
師範學校助教授 藤 五代 策 先生 編

最新刊

手工科應用  
教材としての

玩具の研究及製作法

菊版全一冊  
總數百餘頁  
紙數拾六枚  
插畫拾六枚  
定價金八拾錢  
郵稅金八錢

本書は昨年の夏期フレール會の夏期講習會に於て著者藤先生が講演せられし玩具の製作法及び玩具に關する意見を記述せられしものなり。

幼稚園教育に従事せる方々の必讀すべき良書と信ず。幸に清覽の榮を賜はらんことを。

本書の内容

- 玩具の意義
- 範圍
- 教育的價值
- 玩具に對する名士の諸説分類
- 玩具の形狀
- 玩具の彩色
- 玩具の使用區域
- 個性教育と玩具
- 國民性と玩具
- 玩具使用上の注意
- 玩具業の現況
- 我邦の玩具業の發達
- 我國に於ける有望なる竹木製玩具
- 木製玩具の器械
- 簡易玩具の製作法
- 玩具の由來
- 玩具と俗語

目録書店

東京市橋區南傳馬町二丁目九番

發行所

顧問 高島平三郎先生

# モドコ

此の月刊「繪ばなし」は幼い女の子にも男の子にも誠に良いお友達である。さし繪の綺麗なる事と片假名にて記事の教育的なるとは讀んで面白く大に爲になる家庭向の雑誌なり

◎子供を愛する家庭にはなくてはならぬ讀物なり

毎月一回 定價一冊金十錢郵税 最寄書店になくば  
五厘六册郵税共金五 本社へ御申込あれ  
一日發行 十八錢十二册 郵税 御注文は振替貯金

共金一圓十錢(前金) なれば尤も便利也  
●郵便切手代用一割増●

東京小石川林町五七  
振替東京二七九六三

コ  
ド  
モ  
社

## 幼稚園を修了する幼児達に

わが貴重なる幼児達よ。皆さんは此の月の終りには幼稚園の教育を了へらるゝのである。さうして、皆さんが此の頃から楽しみ待つて居る小學校に入らるゝのである。誠によろこばしきことである。

いざ、勇ましく、元氣に、わき目もふらず、良き生徒となられよ。進んでは、中學校高等女學校の生徒としても、一心不亂、前を前を、上を上をとのみ目がけて進まれよ。何ものをも振りかへり見、回顧するの暇をも持たぬ程に進まれよ。されば、幼稚園のことなども、暫く念頭より去らるゝ何の咎めん。たゞ、この後の學校に専念して、その時の先生を尊敬し信頼して、一つでも多く、新らしき進歩を怠らぬ様せられよ。而して、皆さんが受けたる總ての教育の全體の結果を以て、眞に

立派なる人間となられよ。之れ皆さんの親君達の期待なるのみならず、皆さんの爲に二年乃至三年の長き親愛の情を盡されたる幼稚園の先生方の御祈念である。

さて皆さん、眞に皆さんの將來を祈念せらるゝ皆さんの先生方は、皆さんの新らしき幸福と進歩とを希ふにのみ忙しくて、愛する皆さんとの今のお別れの悲しみを思ふの暇もない程である。況んや皆さんの心の裡に始終記憶として御自分をとめて置き度いといふことさへも、皆さんに向つては別段求められない程である。それは實は先生方が愛する皆さんへの切なお望みなのである。聊かの無理もない自然なるお望みなのである。しかし、皆さんの之からの新しい専心のために、それをも望まれないのである。

しかし、私は信じて居る。皆さんは、假りに暫らくの間、幼稚園のことを忘れ、先生方のことを思ひ出すことがないにしても、いつかは、幼稚園と幼稚園で可愛がつて頂いた先生方とを、しみじみと思ひ浮かべ、考へかへす時のあることを信じて居る。それは何時であらうか。或は皆さんが、まだ學生で居る間にも、事にふれ、時にふれて、さういふことがあるかもしれない。そして、なつかしさに幼稚園を歸り訪はるゝことがあるかもしれない。しかし、私のいふのはそれ等ではない。さういふ感傷的なことをいふのではない。もつと嚴肅に、もつと深刻に、もつと人生的に、幼稚園と其の先生方とを思ふことがあると信ずるのである。

皆さんは、皆さんの人格的成熟の或る時期に於て、自己の人格構成に與つて關係ありと思はるゝ、諸種の事實を、その時以前の過去の生涯の中に探がさるゝことが來るのであらう。而して、それ等

の諸事實の中から、最も重要なものとして、自分の受けた教育を思ひ出し又感謝せらるゝ時が來るであらう。そして、その感謝の對象としての多くの恩人の中に、いろゝゝの學校で教育を受けた諸先生を思ひ浮かべらるゝ時が來るであらう。殊に、上の學校の先生方から段々下の學校の先生方へ追懷を辿つていつて、今之から皆さんがお世話にならうとして居る小學校の先生方を、したはしくも、うれしくも、有り難くも思ひ浮かべらるゝであらう。但し、之れは今の皆さんには何のことかよく分るまいが、其の時になれば、よく分ることである。而して、其の時に、然り其の時に、皆さんの感謝の追懷は小學校で止まつて仕舞はないで、もう一つ舊い幼稚園まで遡らなければならぬ。ならぬと言へば傍から強ひることのように聞えるが、皆さんは必ずさうだと私は信ずるのである。私が特に今日言つて置き度いのは此の事である。

世の人の多くは、幼稚園時代の追懷を、たゞ夢

の様だ霞の様だといふ。その夢の中に處々多少濃く明瞭な處もあり、その霞の中に比較的濃い點はあるにしても、全體として、兎に角く漠然たるものだといふ。それも記憶が漠然として居るといふだけでなく、思索して見て、分解して見て、たゞ樂しかりし夢、美しかりし霞との外、そこに何等の實質的な、更に平にいへば、人格構成の上に、之れと言つて捉ふべき利益のあつたことを見出し得ないといふ。楽しい時期ではあつたが、利益の時期であつたといふことが餘りはつきりしないといふ。従つてそれ等の人々は、生涯に與へられた教育的効果の總和を勘定する時に、往々にして幼稚園をぬきにする。すなはち、なつかしい昔としては思つても、自分にとつて、實に切實なる價値であつたとは考へない。従つて、幼稚園の先生方に對しても、詩の思ひ出の活きた記念としてか、或は、其の先生に於て幼かりし當時の自分を思ひ出して、なつかしく、したはしい方としてか、或

は又、幼弱なる當時の我れの愛護者としての、懇な御厄介を恐縮に思ふとか、先づこれ等に止まつて更に一步を進めない。更に一步を進めないとは何か、すなはち、當時の軟弱微小なる、しかしながら、わが人格構成の第一歩としての最も貴重なりし時期に於ての、教育者として此恩といふことを思はない。世の人の多くは、こゝ迄一步を進めて居ないのである。皆さんも亦同様なことになるのであらうか。

皆さん。將來に於ける無限の期待の負擔者たる皆さん。若し、皆さんも世の人の多くと同じことであるのならば、私は、皆さんの今迄居られた幼稚園のために、皆さんの大好きな先生方のために、どんな悲しい、遺憾なことかと思はざるを得ないのである。但し、皆さんの先生方は、別段それで皆さんをおうらみなさりはしない。草の種子を蒔く人や丹精する人は、その草が花を開いた時、花から恩を思はれようとは思つて居ない。少しでも

美しい花に咲いて呉れることが、そのことが自分への何よりの酬みだと思つて居る。皆さんの立派な人格の成熟は、それが何よりの事實として、先生方を満足させるのである。先生方は、此の二年三年の御教育が、皆さんの人格構成の諸勢力の中に、與り加はつて一個の貴重なる要素をなすことを、確信して居られるのである。何人が何といつても、自らは疑ふ處ない確信を有して居らるゝのである。皆さんが、後になつて、それを明かに心づかるゝや否やに何の左右せらるゝ處のない程、確信して居らるゝのである。況んや、更めての感恩の辭などを少しでも望んで居らるゝのではない。そんなものは必要のない程、皆さんの教育者としての自己の價值と尊嚴とを確信して居られるのである。

しかし、私は、先生方には餘計のことかも知れないが、皆さんに注意して置く。皆さんは、將來可なり遠き將來、各自の人格の成熟の時期に於て

顧みて諸種の教育の効果を教へる時に、必ず、忘るゝことなく、幼稚園教育の効果をもお數へなさい。そして、今、皆さんのお別れせんとして居る先生方の多くは御世話に對する御禮と共に、其の教育の恩を感謝することをお忘れなさるな。そして、美しく咲いた花の様な、その時の立派な皆さんの人格を、先生方の前へお目にかけて、先生方を悦ばせてお上げなさい。

私は、皆さんのために、幼稚園のために、幼稚園の先生のために、此の私の希望の實現を切に祈念して已まないものである。(倉橋生)

手をのべてしたひ寄る兒を手をのべて

抱けば何かえたるよるこび (西山しづ子)

はしけやし資のごとく幼兒の

ひとりひとりが輝けるなり (同)



# 幼児保育の方針に就て

(京阪神聯合保育會に於ける講演の筆記)

京都帝國大學教授文學博士 小 西 重 直

本日は京阪神三都市の幼稚園に關する教育の御研究の會であります、私に何か話をせよと云ふことでありましたのですが、實は幼稚園のことに關しましては、誠に濟まないものでありますけれども、十分細かな、又新しい研究はいたして居らな

いのであります、其の細かな細目に亘つてのことは、尙ほ皆さんから事實を伺つて、もう少し注意をいたして見たいと考へて居るのであります、本日は實際上の細かなことに就きましたは皆様の御意見を承り、私の方では大體幼稚園の保育に關しては其の大いなる方針としては、斯う云ふものではあるまいかと云ふとの問題を提出しまして、尙ほ是から皆さんの十分演説もあることでありますから、さう云ふ機會に於きまして皆さんの御意

見を伺つて見たいと、斯う云ふ考であります、私の話することは決まつたことでなくして、一ツの問題としてお話をして見る、斯う云ふ考であるのであります。

子供の小さい、即ち小學校にまだ這入らない幼児の時代に於きましての取扱方に就ては、例へば幼児預り所の如きものもあります、又幼稚園があり、家庭教育があると云ふやうな工合に、色々機關があるのであります、本日は其の家庭教育及び幼児預り所と云ふことは除けて、所謂幼稚園と云ふ問題に就てのみお話をするのであります、此の幼稚園の保育の大いなる所の方針と云ふものは、既に日本に於ては文部省に於て法令の上に決まつてるのであります、私の本日申し上げること

は、其の法令の上に決まつて居ることを改良するとか、若くは根本から變更する、さう云ふ大問題でなくして、其の法令で決まつて居る所の精神に従つて我々は何う取扱ふかと云ふ、其の方針である、即ち此の法令に於ける方針としましては、幼稚園と云ふものは家庭教育の補ひをする場所である、幼稚園と云ふものは家庭教育の補ひであると、斯う云ふ風になつて居るのであります、是れは小學校令の第何條かに幼稚園に關する大方針が揚げてあります、其所に出て居る其の意味に於て此の幼稚園と云ふもの、保育は家庭教育を補ふものである、斯う云ふ所謂日本に於ける今日の大神に基いて、其大精神を實行する場合に我々は何う云ふやうな方針を執るか、それに關して自分の考をお話して見やうと思ふのであります、無論一面には此の法令の上に現はれて居りませぬけれども、事實上幼稚園を経た者が、小學校に行く——其の小學校との關係に就ては事實上の問題として

随分大きな問題があらうと思ひますが、即ち此の幼児の生活は遊戯である、小學校の生活は仕事である、其の遊戯生活から仕事の生活に移る、其の經過の工合——幼稚園としては自分は段々申し上げますが、矢張り遊戯的生活、遊戯的保育と云ふものが本體であります、小學校との關係から見れば、幼稚園の中で子供の大きな者に對しては遊戯と云ふものを本體として、それから仕事に移つて行く、其所に幾らかの暗示を與へるのである、斯う考へて居る所謂家庭と云ふものから小學校に來る子供は、殆ど純粹なる遊戯的生活から直ちに仕事の生活に移る然るに幼稚園を出て來た子供は遊戯的生活ではありませんけれども、其中に少し仕事の暗示を受けて來るのである、さう云ふ差違があらうと思ふ、此の問題は餘り深く論究する時間がありませんから、他日に譲ることに致します、本日は大體に於きましては、本省の方針に基きまして、所謂家庭教育を補ふと云ふ意味の幼

稚園の保育に就て主にしてお話をして見やうと思ふのであります。

それで此の幼稚園の保育に關しましては、從來色々な主義が現はれて居る、従つて其の主義に立つて色々な實行が伴はれて居るのであります、日本でも外國でも、從來色々な變遷をして來て居ると思ふのであります、其の變遷の一ツをお話をして見ますると云ふと、第一の種類は幼稚園の保育と云ふものが獨逸の學者ヘルバルトの考に從つて動いて居るのである、即ち幼兒保育と云ふものは、矢張り子供の知識の方面に餘程注意しなければならぬとの主義である、例へば子供に孝行と云ふ觀念を興へなければならぬとすれば、或は恩物に於ても、手技に於ても、或は遊戯に於ても、色々な方法に於て孝行に關することを教へる、例へば大變に孝行であつた人の話をする、其の孝行な人の持つて居た物を作るとか或は孝行な人の話を遊戯に作るとか云ふやうなことをして、孝行

と云ふ概念を養ふ爲めに、各方面から色々な事を教ふるのである、斯の如き幼稚園保育法が大分一時あつたのであります、けれども是れはヘルバルト風の教育と云ふものが壞れて居る如く、矢張り幼稚園に於ける保育の此の主義も今日は壞れて居るのであります、即ち御承知の如くヘルバルトは人間の心と云ふものは觀念である、其の智識上の觀念と云ふものから情も起つて來れば、意志も起つて來る、心の本體を觀念智識に置いて居るのである、其説は今日は壞れて居る、又ヘルバルトの考はさう云ふ考であつて、幼稚園を作つたフレibelの考とは全然違つて居る、従つてフレibelの考を立てんが爲めにも亦ヘルバルトの方から來て居る主義は壞れて居る、幼稚園の方では、即ち此のフレibelの方では皆さんの方が私よりもより以上御精通であるであらうと思ひますが、子供心と云ふものは物を創造する力である、斯う考へて居る、ヘルバルトは人間の心、又子供の心は無

論でありますが、智識概念が本體であつて靜的である、幼稚園を作つたフレーベルの考は、人間の心、子供の心と云ふものは物を創造する力であつて、動的である、物を生産する力である、斯う考へて居る、勿論其のものは物質ばかりでなく、廣い意味に於ける物を作り出す力である、それはフレーベルは此の人間と云ふものは神の恰度うつしであつて、神と云ふものが宇宙萬物を創造したものである、人間は神のうつつである、故に人間も物を創造する力を持つて居るのだと云ふ考であるのでありまして、其力を發達させるのに幼稚園と云ふものは子供の實際の行ひ、實際の遊戲に依つて發達せしむるのである、彼の恩物の基本形の如きは即ちフレーベルの其考を現はして居るのである、フレーベルの恩物と云ふものは、物を恩物のやうな形に變へて、色々な形を造つた、それで以て建設的に子供が物を作るところの働きを稽古させるのである。其の意味から恩物が出來て居る、又

式も其の通り、それからもう一ツ、フレーベルの考としては天地人統一の考、——神様と、人間、自然界、皆うまい鹽梅に調和しなければならぬ、斯う云ふ考を持つて居つた、即ち天地人の調和である、或はフレーベルを他の言葉で現はしますと、宗教と云ふものと、それから創造の力と云ふもの、個人々々の節制力、此の三ツがうまく調和すれば其所に天國が生れて來る、それが理想の境遇であると云うて居る、さう云ふ風の調和を經、段々發達して行くのが人間の立派な生活であると、斯う考へて居る、其邊の考が大分ヘルバルトの考と違つて居る。

そこでフレーベルはさう云ふ天地人の調和、或は人間社會や、自然界及個人々々の天賦の調和、斯う云ふ各方面の調和と云ふものから矢張り恩物も考へて居る、例へば圓い形の恩物がある、其の圓い格好の恩物は是れは運動が自由である、何方の方でもコロ／＼轉げます、それから夫れに對し

て今度は立體の正方形のやう、是れはチャンと座ります、餘り動かない、角が澤山あつて又平面の面もあるから座つて動かない、此圓いものと正方形のもの、其の兩方は互に反對と云ふものであるが、夫れを調和しなければならぬ、それを調和するのは所謂圓柱形の棒である、圓柱形の棒と云ふやつは兩方の端の底の面が圓く平面になつて居る、圓いけれども、此奴を斯う立てると云ふとチャンと座つて居る、動かない、其邊の所が正方形に類似して居る、然し此棒を横にして轉げると云ふ所は圓の性質に似て居る、圓柱形は即ち調和の棒であると、斯う云ふ考であつたらしい、そこで此の恩物の基本形の球の圓いやつと、立體と圓柱と、此の三ツのものが集つて、お互ひが調和して、或は此の圓いやつを假りに天と見れば、角のやつは地である、圓柱形は人である、即ち天地人の調和である、或は又之れを假りに圓いやつは人間の情の力である、或は角のはつは人間の意志の力で

ある、又圓柱形のやつは生産の力である、こんな分類しても宜からうと思ふ、さう云ふ風にフレールは餘程ヘルバルトは違つて、人間の力、人間の精神と云ふものを活かして考へて居る、動的進化的に考へて居る、斯の如き意味からして、ヘルバルトの考と云ふものは、幼稚園の方に於きまして一時或幼稚園等に於きましても、又或學者等に於ても、幼稚園の保育といふものは矢張り相當の概念、相當の智識を養ふものであると云ふ考であつたのが、今日ではそれが壞れてしまつて居るのである。

それからもう一ツは、此の幼稚園の保育の主義としましては、家庭的の仕事の主とする、或は之れを家事上の主義、或は家事的保育主義と云うても宜しい、此の主義は何う云ふ考から來たかと申しますると、人間の發達と云ふものは個人の發達と云ふものと、それから團體的人類全體の發達の状態に似て居る所がある、例へば十二三歳の青年

前期時代に於ては随分亂暴なものである、親の言ふことも聞かず、木登りしたり、勝手に何處かへ行つたり、色々な亂暴をする、喧嘩もする、此の青年時代に色々亂暴すると云ふことは、是れは太古人類全體に嘗てさう云ふ時代があつたのである、太古の或時代は人間全體に於て皆亂暴で、或は木登りするとか、游泳をするとか、野生的生活をして居つたのである、其の野生的の祖先の生活が遺つて、今日青年時代に現はれて居るのである、と云ふやうな譯で、此の子供の發達の状態と、人類全體發達の状態と、似て居る所があると云ふが、さう云ふ學說がある、さう云ふ學說からして子供と云ふものは、矢張り太古の原始的人類の發達に似て居る、其の人類の發達から考へて見ると、太古の人には例へば狩獵をする人も、又漁獵をする人もある、或は時代が進んで牧畜をするとか、農業をするとか、商業をするとか色々な事實がある、そこで子供の一番小さいやつは、太古の發達順序

の獸を狩るとか、或は魚を獲るとか云ふ時代に相當して居るものである、そこで幼稚園あたりの子供には、獸を狩るとか、魚を獲るとか、或は物を煮るとか、或は洗濯をするとか、さう云ふことをさせるのが、是れが相當の順序であると云ふ考からして、幼稚園で例へば芋を掘らせるとか、或は芋を運んで來るとか、或は芋を鍋に入れて煮るとか、或は洗濯物をさせるとか、實物を取扱はせて、さうしてやつたと云ふやうなことも随分米國あたりであつたのであります、今日でも幾らか残つて居る、事實やつて居る學校もある、是れは幼稚園の保育と云ふものを、一種の實際生活に化するやうな弊害があらうと思ふ即ち芋なら芋の實物を持つて來て、それを煮ることは、是れは實際のことである、お互ひの家庭に行つても能く分りますが、小さい子供と云ふものは、まださう云ふやうな人生の實際生活に觸れないものである、其時代に於て既に此の實際生活をやらせるといふものであ

る、けれども夫れを辯護して言ふには實際芋なら  
芋を煮るけれども、それは十分子供では可かぬか  
ら先生から手傳ふのである、又子供に煮らして置  
いても、それが十分煮えなくても宜いではないか、  
所謂結果は問はない、斯ういふ辯護がある、それ  
は一應尤もではあるけれども、併しながら結果を  
問はない所の實際の仕事といふものは、是れは寧  
ろ悪い習慣を作るものであらうと私は思ふ、本當  
の芋でなしに、例へば土を持つて來て芋のやうな  
ものを製造して、炊事の戲をなすは宜しい、けれ  
ども本當の芋を持つて來て、本當の醬油を使ひ、  
本當の火を使ひ、本當の鍋を使つて煮て、煮えな  
くても宜しいといふ習慣をつけるといふことは、  
寧ろ悪い習慣をつけるのであると私は思ふ、故に  
斯ういふ意味の家事主義、所謂家庭上の仕事の上  
から來た仕事の働きをさせるといふ其の考は、幼  
稚園に於ける保育主義として、子供の遊戯を没却  
して、小さい子供に仕事を強ひ、小さい子供に實

際の仕事を強ひるものであると、斯う思ふのであ  
る、從つて是れは幼稚園の保育主義ではない、モ  
ンテッソリーの如き多少此の様な仕事を課して居  
る様であるが夫れは考物である、たとへ子供は面  
白いと思ふても、以上の理由によりて考物である、  
矢張り子供は子供相當の生活、子供相當の保育を  
しなければならぬ、さういふ意味で大人が考へて  
——人類の發達は個人の發達と似て居るといふや  
うな議論を考へて來て、たゞ大人の理窟から子供  
に應用してさうして子供の遊戯生活を打壞してや  
るといふことは甚だ面白くないと思ふ、無論子供  
の方では、或場合には随分其事に興味を持つもの  
である、子供の方ではそれを矢張り一ツの遊戯と  
考へて居るかも知れぬ、けれどもさういふ實物を  
實際使つて、其の結果が可かぬといふやうなこと  
は、悪い習慣を作るものであると思ふ、斯ういふ  
意味からして家事主義の保育主義と云ふことは、  
用ゐない方が宜からうと思つて居る、亞米利加邊

には多少さう云ふことか遺つて居る、けれども米國も今では段々さう云ふ考は廢れて居る。

それからもう一ツの主義は、自由遊戯に關する主義である、此の自由遊戯に關する主義は、是れは最近に於ける兒童心理學の研究の方から促されて來たものであらうと思ふ、即ち兒童心理學の方では、子供の活動力を重んずる、是れは教育の方でも勿論重んずるのでありますが、成るべく子供は、子供らしくやるのが宜い、丁度今の家事主義とは正反對の考であつて、子供に子供らしくない仕事を強ひては可けない、子供は自由主義でやるのが本當である、其の子供本然の状態から見て、兒童心理の本當の状態から見て、自由遊戯主義を主張して來て居る、即ち此主義に依る幼稚園の保育法は何うするかと云ふと例へば恩物でも手技でも、其他色々な玩具を持つて來て、子供が勝手に夫れを持つて遊んで居る、又一定の時間などを更に設けず、全く個人的の興味に任して置く、總て

のことを皆子供の個人的興味に委して、たゞ保姆は夫れを見て、悪い場合には幾らか指導してやると云ふだけで、總て子供は自分の個人性の趨く所に依つて何かやつて居ると云ふのである、それが所謂自由遊戯主義である、自分勝手にやつて居る、此の自由遊戯主義は、實は一面に餘程家庭の生活に近い、即ち家庭に於ける子供は、大體普通の家庭に於ては先づ子供は自由主義の生活である、父も居り母も居り、其他色々な人が居るけれども、大體先づ放つて置くのである、それで子供は色々な事をして遊んで居る、悪ければ親に叱られる、此點に於て自由遊戯主義は子供の家庭生活に似て居る、大變縁が近い、さう云ふ方面からして此の主義を見れば、餘程面白い考であると思ふ、それから又お互ひ幼稚園の保育に於ては子供の個性を重んじなければならぬ、是れは何所の學校でも同じことでありますが、幼稚園でも同じことで、子供の個人性は皆違つて居りますから、それは始



終見て置かなければならぬ、それを観て、それに従つて教育して行く、是れは其の個人性を観るにも大變都合が好い、子供が自由に勝手に遊んで居るのだから、教師が觀察するのに極く都合が宜い、それを十分觀察して、それから子供の性質に従つて色々な注意をしてやる、此の子供の個人性に重きを置いて、個人々々自然に暢びり伸ばしてやると云ふ、是れは面白い主義であらうと思ふ、所が又他方から考へて見ますると云ふと、幼稚園の保育と云ふものは純然たる家庭教育ではない、家庭教育を補ふ教育である、家庭教育を助ける教育である、して見れば純然たる家庭生活のやうなバラバラな自由遊戯だけでは、幼稚園を設ける所の意味は無くなつてしまふ、唯親と云ふものが自分の子供を構はず、たゞ親が樂する爲めに、國家なり市が幼稚園を置いたのではない、是れが婦人の墮落に流される點である、苟くも幼稚園を設けて行く以上は、其の家庭教育を助けると云ふこと

が必要である、さう云ふ意味から見れば、たゞ子供は子供なりに、勝手に遊ばして置くと云ふだけでは可かないと思ふ、即ち其所に家庭の母の手が十分届かぬ、其の母の手の届かぬ所を我々が指導して行く、其の指導の意味が、自由遊戯の方では甚だ不完全ではないかと思ふのである、又子供の勝手にやつて居ります時には、子供の努力の精神などの養成は六かしい又一方には人間社會と云ふものは一ツの團體生活である、其の團體生活の、靡げながら基礎を作ると云ふには、矢張り相當の社會的遊戯も必要である、團體的遊戯も必要である、然るに自由遊戯の主義では個人々々バラバラにやつて行く、さう云ふ意味に於て此の所謂自由遊戯生活——自由遊戯主義と云ふものは決して夫れが全然善いと云ふ譯には行かないであらうと思ふ、従つて私は矢張り幼稚園の保育と云ふものは、純然たる自由遊戯主義では可けないと斯う考へて居る、殊にフレイベルなどの考を見まし

ても、餘程社會に關する考が強く働いて居る、フ  
レーベルの考では、寧ろ個人遊戯よりも社會的遊  
戯が多かつた、其當時は獨逸邊の國家的狀態と云  
ふものは、共同的精神を促して居つた、ナポレオ  
ン戰爭に獨逸が敗けて、獨逸が復興しやうと云ふ  
時代であつたから、團體的精神、國家的精神を鼓吹  
した時、其の時代に於てフレーベルは矢張り一種  
の團體生活、社會的生活の必要を幼稚園教育に於  
て實行した譯である、然るに自由遊戯主義と云ふ  
ものは、其の方が殆ど無く、個人的バラ／＼にな  
つて居ると云ふ傾向を持つて居る、極端である、從  
つてフレーベルの幼稚園を作つた趣旨にも餘程遠  
ざがつて居るのである即ちさう云ふ意味から私は  
各方面から見まして自由遊戯主義と云ふものを幼  
稚園の保育主義とすることは出來ないと考へて居  
る。

そこで大體今日までさう云ふ三の主なる主義が  
現はれて來て居るのであります、然らば我々

は何う云ふ考、何う云ふ主義の下に立つて、大體  
案を立つべきであるかと云ふのがお互ひの實際問  
題であると思ふ、又私の研究問題であるのである、  
自分の考では、幼稚園の所謂保育の精神を決める  
には各方面から見なければならぬ、第一幼稚園と  
云ふものは家庭の教育を補ふ一ツの機關である、  
斯うする以上は矢張り是れは大いなる意味に於て  
國家教育の、或は國民全體の教育の上に密接なる  
關係を持つて居るものである、家庭教育が完全な  
れば、學校教育も非常に都合が宜い、家庭教育と  
云ふものは、國家全般の教育の基礎になると云ふ  
大なる役目を持つて居る、斯うすれば幼稚園の保  
育と云ふものは、一面國家は何う云ふ要求をする  
かと云ふ國家の要求に我々は眼を注がなければな  
らぬ、そこで今日の國家の要求には色々あるであ  
りませうが、教育上に於ける國家の要求としての  
大なる一ツは、自分の考では何うしても此の國民  
と云ふものが自分の方で一ツ物を作り出す、精神

の方面に於ては工夫を積み、今日より以上に明日は進んで行く、日に日に新しくなつて行く、今日の吾以上の吾を段々作つて行く、物質の上に於ても段々工夫を積み、自分で新しいものを作つて行くと云ふやうに、精神上の方面に於ても、又物質上の方面に於ても、物を生産する、創造する、物を作ると、さう云ふやうな力を要求することが餘程痛切であると思ふ、それからもう一步進んで、自分の作つたもの、又人の作つたもの——精神上、物質上の兩方面に於て、自分の作つたもの、人の作つたもの、それを保護し、建設し、仕上げて行く、或は完成する、たゞ物を作るばかりでなく、段々保護を加へ、同情を以てそれを完結する、斯う云ふ力を要することが切であると思ふ、獨逸の如き色々なことが發明發見され、其他學術の研究であつても、随分昔は他の國の模倣をして居る、幼稚園の如きは——フレーベルは獨逸人でありま

べスタロッツチの所へ行つて習つて居る、尤も考は違つて居るけれども、それにより刺戟を受けて居るのである、べスタロッツチの方では直觀主義を主張した、其の直觀主義と云ふものは例へば物を教へるのに、其物の名とか、其物の格好とか、其物の數とか、さう云ふ名や、數や形、之れを教へなければならぬと主張して居る、フレーベルはさう云ふ考に基いて、まだ夫れだけでは不十分であると云ふので、子供には名や、數や、格好と云ふやうなものでなしに、子供の實際の活動、子供の實際の働きを基にする、即ち遊戯とか、恩物とか、或は手技とか、是れは皆子供の働きである、べスタロッツチの形や數や名や、此の三ツに對してフレーベルは恩物、手技、遊戯の三ツの活動を得たのである、さう云ふ風にべスタロッツチの考を發達させて居る、工夫して發達させたに過ぎない、獨逸小學校の教育にも其通り、べスタロッツチの非常なる影響を受けて居る、其他大學の如きは、之れ又

佛蘭西の大學の模倣であつた、昔は佛蘭西のバリ大學と云ふものは歐羅巴の大學の中心であつて、獨逸では佛蘭西のバリ大學と云ふものを皆眞似をして作つた、それを段々工夫を凝して今日のやうになつた、斯う云ふ風に建設して來て居ると思ふ、無論只今は各種の方面の要求があります、殊に今回の時局等から見まして、今後國民教育に於ては餘程自分で物を作る、精神及び物質の兩方面に作る、さうして又他人及び自分の作つたものを建設して行つて、完成して行くと云ふ精神を作ることが餘程大切であらうと思ふのである、さう云ふやうな國家の要求が餘程切であらうと實は思つて居りますが、其の要求と云ふものに幼稚園はどう答へて行くか、是れが一の問題である、それからもう一ツは幼稚園も矢張り一の教育活動の中にある所の組織の一でありますからして、一般の教育思想に對する所の關係を持つのである、今日の一般の教育界の思想と云ふものは、矢張り此の

國家が要求する如く一種の斷えざる努力とでも云ひますか、斷えざる努力の精神を要求して居る、細かく申し上げますれば、矢張り精神及び物質の方面に於いて何か新しい物を作つて行く、沈滞しない、而もそれを建設して行くといふことを恰度日本の國家が要求する如く、教育界に於ても矢張り建設しつゝあるのであります、さう云ふ意味に於て國家の要求も亦教育上の一般の思想の要求も、共にお互ひに物を創造し、それを建設すると云ふ人格の力を餘程要求して居る。

夫れからして幼稚園を作つたフレーベル夫れ自身の考、要求が一面あると思ふ、是れは幼稚園の立場として見て、設立者は何う云ふ考か、是れは先刻來申し上げる通り、フレーベルは人間の心と云ふものは、物を創造する所の力である、斯う考へて居る、さう云ふ考でありますからして、我々が今日考へて居る如く、國家の要求及教育一般の思想と餘程近寄つた事情がある、斯う云ふ風に色

々な方面から我々が幼稚園の保育に對しては關係があると思ひますが、國家の方面に於ても物を作り建設する要求がある、又一方教育思想から要求することもさう云ふ要求をして居る、斯ういふ各方面の要求があつても、若し人間の方に於て、人間の性質と云ふものが本來それに適せぬものであると云ふことであれば、どんな要求を受けてもそれは實行の出來ないことである。併しながら、人間の本性、人間の性質を考へて見ると云ふと、矢張り人間の性質は斯う云ふ要求を受入れ答へて、實行するだけの立派な力を持つて居る、斯う考へる、近頃の心理學も段々發達して來て居りますが、動物の方では、例へば犬なんぞが自分の仕へて居る主人、其の主人と云ふものが家に居らないと云ふ場合には、其の主人を思出すといふことがどうもあるやうである、詰り現在自分の前に物が無いのだけれども、それを自分の前に其物があるやうに考へる、是れは一種の想像の働きである、さう

云ふ想像の働きが犬には有りさうである、けれども想像の働きのモット進歩した創造的の想像、即ち色々な材料を集めて、統一して新らしき形を作り、それを段々と發達せしむるやうに仕組み、さうして一の新しい物を作る、即ち創造的の想像ですナ、さう云ふものは動物にどうも無さうである、例へば鳥が巢を造る、是れは色々な材料を集めて、今までにない形を立派に造つて行く、けれども此の巢と云ふやつは、數千年前の巢も今日の巢も異りはない、又將來も餘り變りはない、即ち鳥は立派な巢を造るけれども、それは發達しないのである、従つてそれは發達する所の意味の生産的想像力とは云はれない、大體彼等動物といふものは、所謂本能以上に發達することは出來ない、本能に止まつて居る、幾らか發達はするけれども、大體其所に止まつて居る、人間に於きましては色々なものを集め、新しい物を作つて、それを段々發達させて行くと云ふ力がある、鳥の歌は實に立

派である、鳥は歌つてピィ／＼言ふけれども、夫れ以上鳥として發達しない、けれども人間は鳥の歌を聽いて、それに時の關係を加へて立派な音楽を作つて行く、其の音楽も段々發達するのである、又鳥の巢を見ると誠に立派である、けれども夫れ以上人は工夫を凝し、それ以上の物を作るのである、さう云ふ風に人間と云ふものは創造的、生産的想像力に依つて段々其事を發達させて行くのである、或は動物に於きましても、色を好む動物もあれば又佛國のロボーの説いて居る如く、輝いたものを好む動物もある、是れは好み樂しんで居るけれども之れを集めて發達するのは作らない、それは人間は物を集めて立派な繪も描けば、或は立派な建築もする、裝飾もする、さう云ふ風に人間の方では發達して來る、勿論我々は物を作ると云ふ場合に於きましては、其の物を作る必要に迫られると云ふことゝそれから所謂必要を感じるのと、一方には精神の方では即ち生産的想像力、

是れが働いて居る、動物の方では、或場合には其物を作る必要を感じるかも知れぬ、けれども夫れを作る性質の働き、即ち生産的想像力がない、之れが人間には其の要求を感じ、同時に又其物を作るだけの力を持つて居る、創造的想像力を持つて居るのである、是れだけ人間と動物とは違つて居る、そこで此の理想と云ふものは、人間に固有なものであつて、動物にはない、斯ういふ工合に生産的想像力と云ふものは、人間に固有なものであつて、動物には先づない、あつても誠に少ないものであると、斯う云はれるだらうと思ふ、して見ると、人間に固有なものであれば、人間に於て發達しなければならぬ、斯う云ふ問題になる、けれども人間の固有であるが、併しながら幼稚園時代の小さい子供にさう云ふ精神は何うであるか、國家の方面から見、又一般教育思想から見、フレーベルの考から見て、夫等生産的方面、及び建設的方面の要求が起るのである、人間の本能精神から見

て、皆斯う云ふ性質を持つて居る、然らば是等の幼稚園時代の子供に於ては何うするか、若し幼稚園時代の子供が持つて居れば、それは誠に仕合せである、若し不幸にしてさう云ふ要求を受けても、其本質が缺けて居ては實行は出来ない譯である、然るに幸にも、我々がお互ひやつて居る幼稚園に於きましては、所謂其生産的想像力といふものを子供が大部分持つて居る、幼稚園時代の子供の生活は、殆どもう創造的想像力の生活であると、斯う云ふても宜いくらゐである、此創造的想像力といふものは、矢張り段々發達の順序があるのであります、手近い話が、例へば此の小さい子供に兄弟が幾らかあると假定しますと、兄弟喧嘩を能くするものである、其頃に丁度此創造的想像力も發達して來る、未だ兄弟喧嘩の出來ない時代、即ち兄なら兄、姉なら姉から小さい子供に何かされて、全く竦んで居つて泣き出した、自分がそれを幾ら防がうとしても、手を出すと云ふことは六ヶしい、

攻撃的に其の相手の方に向つて撃つてやらうと抵抗する、力もない時代がある、他から色々なことをされると直ぐに泣き出す、此時代には未だ創造的想像力が發達して居らないのである、所が三歳ぐらゐの子供はさうであるが、それが段々大きくなりまして、兄からやられる、或は他の者からやられた場合に、防禦的ばかりでなくして、攻撃的にやり出す、そこで初めて喧嘩が起る、防禦的の時には喧嘩にはならない、所謂本當に兄弟喧嘩の起つた場合に、初めて創造的生産的の想像力が發達して居ると云ふ時代になつて居る、即ち生産的想像力は何時頃發達するかと云ふと、先づ兄弟喧嘩をする、防禦的ばかりでなく進撃的に抵抗して行く慾も出、意志も出來、又體力も出て來ると云ふ、さういふ時代に精神的能力が發達して居るのであると、斯う云ふことになる、又他の方面から見ると、例へば人形を以て能く遊んで居るといふ時代、或は物を捉へて來て、其物を色々な意味に作ると

いふ時代は、皆生産的創造的想像力の働きである、或は棒片といふものを以て劍と思ふたり、或は撃劍の竹刀に使つたり棒一本を色々なものに考へてやつて居る、或は石塊を持つて來て金に考へて見たり、或は小石をお菓子に考へて見たり、喰ふ物に考へて見たり、實際小石以上のものを作る、即ち實際の物以上の物を創造し生産して來るのである、棒は實際の形であるけれども、棒以上に劍とか刀とか云ふものを其所に生産して來る、又小石は小石であるけれども、子供は小石以上に其所にお菓子とか、喰ふ物とか云ふ者の意味を附け加へて來る、生産して來る、是れ皆生産的想像力である、さう云ふ意味に於て、是れは能く觀察すると分るのであります、先づ幼稚園に這入る満三歳頃から大體さう云ふ精神が段々旺盛になつて來る時代であらうと思ふ、即ち幼稚園の時代と云ふものは、殆ど其の子供の生産的想像力の時代である、更に言を換へて申し上げますれば、子供は遊戯的

の生活である、其の遊戯的生活に於て創造的生産的想像力が完全に活動して居るのであると、斯う云ふ時代である、無論子供は其時代に於きましても遊戯ばかりでなく、幾らか實際と云ふ考がある、例へば飯を喰ふと云ふ場合、或はお菓子を喰ふ場合、果物を喰ふ場合には、實際子供の腹の内部の生活、腹が減るとか、咽喉が渴くとか云ふ實際の要求の生活から物を喰ふとか飲むとか、さう云ふ場合は子供の實際的生活である、實際の生活である、それは遊戯でない、だから子供が御飯を喰べる場合、お菓子を喰べる場合、其の喰べる瞬間は遊戯でない、けれどもさう云ふやうな御飯を喰べる、お菓子を喰べると云ふ實際の生活の中にさへも、遊戯をしたがるものである、お互ひ家庭を持つて居ると分りますが子供が二三人で飯を喰つて居ると、お互ひに飯を喰ひながら、お父さんやお母さんに叱られながら、時にふざけ戯れて居ることがある、さう云ふやうな譯で、實際生活に於



ても遊戯をしたがると云ふ傾向を持つて居る、其のくらの子供の生活と云ふものは先づ遊戯の生活である、而も其中に創造的生産的想像力が旺盛に發達すると云ふ時代である、斯う云ふ風に考へて宜からうと考へて居るのである。

そこでさう云ふ意味から申しますると云ふと、

即ち國家が要求し、一般の教育思想が要求し、又フレーベル即ち幼稚園を作つた人が要求して居る、而も一般の人間の性質に於て固有である、又幼稚園時代の子供にそれが旺盛である、斯うして見ますると云ふと、幼稚園の保育主義と云ふものは、創造的生産的遊戯的生活である、是れは無論建設の意味も含んで居る意味に云つて居りますが、先づ生産が主ですから生産的遊戯的生活、斯う云ふやうな意味に解釋して、之れを考へて見たいと私は考へて居るのである、即ちヘルバルトの説に影響を受けた概念主義でなく智識主義でなし又家事主義でもなし、自由遊戯主義でもなし、創造的生

産的遊戯主義である、其意味から見まして幼稚園の保育と云ふものは、兎も角簡單に云へば先づ遊戯生活である、其の遊戯に於て生産なり建設がある、斯う考へる、さうすれば其の生活と云ふものを、假りに今茲にお話の便宜に従つて個人的の働きと團體的の働きに分けて見る、個人的の働きに於ては、例へば先刻の自由遊興主義のやうな工合に、一面に於ては子供の興味を本體とする即ち恩物でも、手技でも、其の他の遊戯でも、子供の思ふ勝手なことをやらせる、此方から餘り教へない、全く個人的に放任して置く、さうして夫れを見て居つて、極く悪いとか、或は間違つて居るとか云ふ時には注意するけれども、餘り干渉せずに、大體子供をして、個性の興味に従つて思ひ／＼遊んで居ると云ふ風に任して置くと云ふのが個人的活動であると思ふ、其の個人的活動から、先刻自由遊戯の場合にお話し申したやうな工合に、一面個人性の發達に依ることであり、又殊に家庭から幼

幼稚園に直ぐ来た子供、殊にそれが年の小さいと云ふ場合に於ては、初めから團體的遊戯をするのは六ヶしいであらうと思ふ、家庭生活に於ては、子供は個人的遊戯をやつて居る、兄弟がありますれば兄弟、二三人と云ふことであるけれども、甚だ團體の意味が少ない、従つて家庭から直ぐ来た者に向つて團體を作るならば、極く小さい團體を作り、二人三人の團體を作る、是れが家庭から来た者に對する保育上の順序ではないかと思ふ、初めての子供が大なる團體を作つた場合には、子供の家から来た時と順序が違つて居りはせぬかと思ふ、是れは或子供の經驗でありますが或家庭で男の子を持つて居る、幼稚園に送つた、所がそれが幼稚園をどうも餘り好まない、其原因を調べて見ますると云ふと、其子供は家庭に於ては隣りの子供や何かと一緒にやつて居つて、極く活潑に駄足をする場合には、思ひ切つて駄足をすると思ふ場合に、一生懸命自分勝手に活動をし盛んにやつ

て居つた、所が幼稚園に這入ると團體的に皆繋がれて、自分自身で活動が出来ない、遊戯なども皆團體的に多くやつて、さうして人と一緒にやる譯で、自分自身で活潑な活動が窮屈で出来ない、さう云ふ風に幼稚園が詰らない、面白くないと、斯う云ふやうな爲めに幼稚園を嫌つた、と云ふ話を聞いて居る、是れが若しも事實であるならば、家庭から来た直ぐの子供に、初めから社會的、團體的の遊戯をやらすことは、それは順序が違つて居ると思つて居る、それで何うしても私の考では、家庭から直ぐ来た者は成べく出来るだけ個人的に、手数は掛るけれども、團體ならば小さい團體を作つてやつて、創造生産建設等の力を遊戯的に養ふのが順序だらうと思ふ、それからもう一方は即ち團體的取扱でありますが、是れは先刻申上げると通り、成べく家庭から来た直ぐの者でなしに、幾らか幼稚園の生活に馴れた者、年の多い者、さう云ふ方面の者には社會的、團體的遊戯をやらせ

る、殊に國民性の一般の同情とか、お互ひ共同して力を協せて事をするとか云ふやうな風に、殊に建設の方面に於ては日本人として餘程互ひに同情を以てやる必要であらうと思ふ、自分の作つた物は無論、人の作つた物に同情を以て、互ひに力を協せて建設して行く、斯う云ふ協同心、同情と云ふものが最も必要であらうと思ふ、さう云ふ精神を作る爲めに、社會的團體的のことをやる、遊戯に於ても、恩物に於ても、手技に於ても一緒にやらせる、個人的の方面ではバラ／＼にやらせる、けれども、社會的の方面に於ては一緒にやらせる、斯る意味に於て一方には個人的取扱により子供の個性が伸び、他方には社會的團體的取扱によりて、子供の社會的協同心、一般社會精神と云ふものが發達して來るのである。

それからもう一ツ具體的の案としましては、幼稚園は教育でなくて保育である、保育である以上は、是れは即ち體育に重きを置くのに決まつて

居る、斯う思ふ、そこで個人的取扱の方に於きましても、社會的團體的取扱の場合に於きましても、體育には全力を注ぐと云ふことが、保育の大眼目ではなからうかと思ふ、お互ひ父兄の眼から見ましても、幼稚園へ子供をやつて置くと云ふ父兄は恐らく子供の健康に就て一番心配するだらうと思ふ、智識に就ては、是れは小學校に這入れれば、もう子供は澤山に詰め込まれる、又其他の精神に於ても小學校に入れば段々伸びて來る、幼稚園の方では智識を教へて貰ふことや、其他一般の六ヶしい精神を作つて貰ふことは要らない、先づ幼稚園では身體を造つて貰つて、そうして總ての物の暗示ですナ、所謂芽が出來れば宜いと思ふ、無論時々時事問題、例へば此度の戦争とか或は其他のことに就きまして、多少實際上の智識を與へてやることも必要であると思ひますが、一般に系統的に智識を授ける所ではない、將來智識を發達せしめる原、即ち暗示を與へる所である、例へば球を

轉がすと云ふことを子供がやつて居る、球と云ふものは轉ぶものである、興味を以て球の活動を見て居る、而も球を轉がすには自分の力を働かすのである、そこで自分の力が要る、さうして段々面白く楽しんで居る間に球の圓い形が自然に分つて來る、併しながら圓い形のを砂の上にあけて轉ばす場合には余り轉ばない、けれども板の上に置いてやれば能く轉ぶと云ふことが自分の經驗で分つて來る、それが分れば夫れで宜い、若しそれが將來段々其の考が伸びれば、物體の形、運動の法則、物理學の智識が出て來るのである、けれども其の物理學上の智識は教へない、所謂其の智識の暗示を経験させるのである、さう云ふ譯であつて總ての精神を暗示する所であると思ふ、私はさう考へて居る、又是ればさうでなければ所謂詰込教育になつてしまふ、保育ぢやない、保育の眼目は體育であると思ふ、即ち體育に於ては、殊に基本的體育とでも申しますか、指尖とか、末端の運動

でなく、大きな筋肉、即ち軀幹とか或は内臓とか、腕とか脚とか、其の基本運動と云ふものをやる、其の基本のことが十分出來れば、本當に頑健な者が出來て來る、元來此の基本的の運動と、それから一方末端的の運動と云ふやつは、無論發達の順序から申しましても基本的の運動は先きに發達する、末端的の運動は後から發達する、例へばお互ひ皆赤ん坊時代を經過して居るのであります、子供が生れて少し上向に寝かせられて居る、それから段々自分の手足や身體を動かすのであります、が初の間は指の末端運動より寧ろ手全體の運動をやるそれから足の指より足全體を動かすと云ふ譯で終ひには段々發達して來て這ひ出して來る、這つて來た場合に於きましても、勿論幾らか指の力を使ふ指を使ふけれども、手全體を餘計使ふ、それから足の方でも指を使ふけれども、足全體を餘計使ふ、所謂大きな筋肉を使ふ、段々這ふことから進んで歩んで來る、步行して來ますと今度は

所謂此の二ツの手が自由になりますから、歩行に伴つて手の末端の指尖の運動が出来て来る譯である。

さう云ふ譯であつて、初めは基本的大きな運動が先きであつて、末端的運動は後からである、さう云ふ順序でありますから、自然の順序から申しましても、基本的運動は先きにしなければならぬ、或は重きを置かなければならぬ、それから末端運動と斯うなるであらうと思ふ、是れは又利かなくなる場合にも基本運動は最後まで残る、例へば人間が死ぬる場合には、口が利けない末端の運動が出来なくなる、指尖の運動は出来ないけれども、手全體は幾らか出来ると思ふ譯になる、さう云ふ風に死ぬる場合になつても末端運動が先きに死の状態になると云ふ譯であります、兎に角幼稚園の體育に於ては、基本的運動に最も重きを置く、殊に都會的生活をなす子供には、餘程基本的運動の練習をやらぬと筋骨の逞ましい子供は出来ない、骨組の

弱いヒヨロ／＼した子供が出来て来る、そこで所謂幼稚園に郊外運動の必要が起つて来る、即ち室的の教育でなく、本當の園の教育をすると思ふのが本旨であらうと思ふ、それから又基本練習などに就きましても、例へば駄足などをする場合に於きましても、たゞ好い加減にグル／＼廻るのでなくして本當に自分の勢力を一杯出して、思ひ切つて徹底をした駄足をする、其のくらゐせねば本當の元氣は出ない、尤も余り無理をし過ぎて子供に怪我をさせては悪い、それは大切な人の子供がつて居るのであるから怪我をさせては可けないけれども、怪我を十分させまいと一方に考へて居つて、さうして一方十分元氣よくやらせることが必要であります、けれども多少の擦り傷ぐらゐやつても、父兄として小言を云つてはならぬ(笑聲起る)擦り傷などは家に居てもやつて居る、それは責任ある教師の側から見れば子供に怪我させてはならないけれども、父兄の方からは、私の子供を願

ひ申し置きます、どうかして十分活潑に、少し位擦り傷などをしても構ひませぬから十分保育して下さいと云うて頼むのが本當だらうと思ふ若し幼稚園の父兄會でもありましたならば、さう云ふ注文をしたいと思ふ、其くらゐにしなければ人間の本當の筋骨は出来ない、従つて幼稚園に於きましても木登りなどをやらして宜からうと思ふ、勿論怪我をさせぬやうに、四尺か五尺の高い木を立て、其下に砂を布いて、勝手に其の木に登らせる、殊に都會の方では運動場が狭くて、幅の方は利用が出来ないから、高さの方を利用する、余り細かな窮窟な遊戯でなしに、寧ろさう云ふ意味の、基本的筋肉を養ふと云ふ意味の遊戯の御工夫を願ひたいと思ふ、併し勿論たゞ一方の筋肉の基本的方面だけの遊戯ばかりでも困るのでありますが、矢張り一方には人間として始終細かな方面、一種の末端的運動は必要である、一方より考ふれば末端的運動の技術、或は其の方の細かな運動、それが必要で

あるからこそ基本運動をやる譯である、字を書くのでも指尖ばかりでは書けない、矢張り腕などの全體の大な筋肉の運動が必要である、たゞ指尖ばかりでは本當の字は書けない、さう云ふ譯であるから指尖の細かな運動をするには、矢張り基本運動が必要であると同時に指尖の細かな運動も必要でありますから、其方の練習もやらせなければならぬと思ふ、それを又子供は随分好んで居る、さう云ふことで基本的の運動は大切であり又根本であるけれども、矢張りそれに伴つて細かな運動もやる、けれども其の中間の働が今日では缺けて居るはせぬかと思ふ、基本的極く大きな運動も、細かな運動もあるけれども、其の中間の運動の研究は何うであるかと、斯う私は思うて居る、例へば是れは一つの例であります、紙の上に物を書くこと云ふこと、子供が足の大きな筋肉を働かして駆足をすると云ふことは、大變な違ひがある、後者は基本的の運動である、前者は末端的運動である、

此間に大變な違ひがある、其の間の違ひと云ふものを、中間の働きに依つて混せて行く、調和して行くことが必要である、例へば即ち紙の上に書かせることの前に、子供が自由勝手に持つて行くことの出來ると云ふやうな小黒板を與へ、白墨を與へて置く、斯うすれば、紙の上に書かせるよりは、幾らか大きな筋肉を使ふ譯である、是れは一例でありますが、さう云ふ意味の調和を圖る所の道具、さう云ふ風な御工夫が必要ではあるまいかと云ふ考を持つて居るのであります、是れはマア體育の方からも、一方精神の方からも、兩方に關係がございますさう云ふ意味の中間的で運動を工夫して、調和を圖ると云ふことが必要であらうと思ひます。

色々雜駁になりましたが、要するに幼稚園と云ふものは家庭教育を補ふところの教育機關で、其の教育の主義としては遊戯生活主義である、或はそれを細かく云へば、生産的意味を含み、或は建

設的意味も含まれて居る、人間生活の實際上の問題としては其の副として、時々斷片的に教へて行く、併し系統的智識は宜くない、其の智識の所謂暗示を與へて置くのである、其他感情、意志などの方面に於ても、さう云ふ意味に於て相當な暗示を與へ、保育としては只今申し上げる通り、大會の幼稚園等に於て、餘程基本的方面の體育に一層の研究を積んで下さることが必要ではなからうかと思ふ、斯う云ふ精神であるのであります、尙ほ繰返して申しますれば、先刻子供に少し位の擦り傷位をさせても宜いと云ふ風に云うて言ひ過ぎましたけれども、父兄の方では其くらゐの要求をするのが本當だらうと思ふ、教師の方では怪我をさせまいと十分に注意して居つてさうして思ふ儘に十分活動させる様にした、是れは念の爲めに申し上げて置きます、要するに、其くらゐの覺悟を以てやつて行くことが必要であらうと思ひます以上は自分の研究であつて、之れを是非やれと云

ふことでありませぬ、研究問題として自分の考へて居ることをお話をし、之れを此次の御感想談の時に御批評を願ひ、又御研究の題目としてお話を

申し上げた次第であります、是れで御免を蒙ります。  
(京阪神聯合保育會雜誌第三十四號所載)

『ピッ プ』の話 (ヂッケンス) (二)

英文學に現はれたる子供(二十七) 〳〵

岡田 みつ

「昨夜四人が逃げたのだ。それで鐵砲を打つて皆に知らせたんだ。今また一人逃げたッて知らせてゐるんだらう。」とジョーはこんどは聲を出して言った。

「誰が打ツの？」と僕は訊いた。

姉は裁縫をしながら澁面を作つて、横から口を出した。

「五月蠅奴だ、根掘り葉掘り聞きたがつて。黙つて御出な。空言を吐きはしないから。」

僕は姉さんは失敬だと思つた。併し姉さんはお客の前でもなければ丁寧な仕打はしないのであるから仕方がなかつた。ジョーは、此時に口を大きく明けて、「膨れ」てゐるといふ語を一生懸命に言つてゐるらしかつたので、僕も共に釣り込まれて我知らず姉さんの方へ指して「あの人か」といふ形を口に造つて見せた。ジョーは、其れをてんで取り上げずに、再び口を大きく開いて、力を込めて或る一語を言つて見せたが、僕には何の語とも



判断が付かなかつた。

僕は、切迫せつぱくつまつてかう言つた。

「姉さん、あの……教へて下さいな——何處で鐵砲を打つて居るのだから……」

「まあ、ほんとに此の子は！」「古船ふるふね」で打つたさ。」

「あ……、古船かい」と、思はず、僕はジョーの顔を見た。ジョーは「だから、さう言つたではないか。」と言はぬばかりに、怨みがましい咳拂ひをした。

「古船ツて如何いふ船なの、え？」と僕は言つた。

姉は、針と糸とを僕に差し付けて、首を振りながら、怒鳴り立てた。

「又此子の癖が始まつた！ 一つ物を教へてやると、すぐ十も二十も聞きたがる！ 古船ツて言ふのはね、沼地の向ふにある囚人船の事だよ。」

「囚人船に誰が乗つて居るんだらう。何だツてそんな船に乗せられて居るんだらうな。」と僕は誰に問ふでもなく、圖々しくさういつて見た。姉さんは、胸に据ゑかけたかして、急に立ち上つた。

「よくお聴き、御前が人をうるさく困らせるやうにツて、私は御前を育てたンぢやないよ。そんなものになれば、私が面目ないンだからね。古船に遣られる人は、人殺しをするか、盗みをするか、詐僞じょうごをするかその他種々な悪い事をしてからだ。その始まりは物を聞きたがるのから起こるのだよ。さあ、さつさと寢てしまへ。」と姉はいつた。

僕は部屋へ寢にゆくのに燈火を持つて行くことを許されてゐなかつたから、暗闇を二階へと上りながら——今姉に指拔を投げ付けられた頭部あたまの部分が、痛いまゝに——自分は、その古船に縁があまりさうな氣がしてならなかつた。物を聞きたがつ

た——、今之から、姉さんのものを盗まうとしてゐるのであるから。

其晩、僕は眠つたとすれば、恐い夢を見る爲に眠つたやうなものであつた。自分が、満潮に乗じて河を下つて、その古船の方へ行くところだの、絞首臺の近くを通ると、氣味の悪い海賊が僕に聲を掛けて、早く来て絞首臺で首を縊められてしまへ。愚圖々々するなといつたり、するのであつた。僕は何せよ、夜の白々明けに、食物部室へこつそり行かなくてはならないのであつたから、眠つてならぬと考へた。手軽く燈火を點する工夫がないから、夜中にはとても目的を果すことは出来ないのであつた。

で、眞黒の帳を垂れたやうな窓がやゝ鼠色を呈して來ると、すぐに僕は起きて、階下へ行つた。踏み締める板も、板の破目も皆「泥棒／＼起きなさいよ、御内儀さん」と呼んでゐるやうであつた。

食物室にはクリスマス前なので、平常よりも材料

が澤山あつたが、僕は品物を見定めたり、撰り取つたりする暇は全然なかつた。大急ぎでパンと乾酪と刻み肉とを取つて、昨夜のパンと一所に半巾に包み、ブランデーを少しガラス瓶に移し、其から肉のあんまり附いてゐない一片の骨と、まん丸い充實してゐる豚肉の饅頭とを持ち出した。室は饅頭は持つて行かぬ積りでゐたのであるが、ふと棚の上に登つて見たらば、大切さうに片隅に覆ひのかけてある大皿があつたから、何だらうと思つて見たところが肉饅頭であつた。此二三日のうちに食べるのでなくば、當分は紛失したのが知れまゝいと考へた、其れをも盗んだのである。臺所から鍛冶工場く續くやうになつてゐる戸口を明けて、僕は工場から鑪を一つ持つて來て、それから以前通りに締りをして、昨夜歸宅した時に入つた戸口から抜け出して、霧の立てこめてゐる沼地の方へ走つて行つた。

霜の深い濕つばい朝であつた。霧が深くて路案

内の指さしの柱も、よく／＼近くまで行かなくては見えない程であつた。いよ／＼沼地へ行き着いてからは、ます／＼霧が濃くて、僕が物に突き當るといふよりも、物の方で僕に突當りに来るやうな感があつた。後ろ暗い事のある人間には、それは随分厭なものであつた。門でも、土手でも、霧の中からニューと出て来て「人の饅頭をもつて行く……あの子を追かけろー」と言ふかと思はれるし、牛までが急に顔を出して、僕の顔を孔の明く程に見入つて、鼻の孔から「こら、小泥棒め！」と息を吐いてゐる。其中でも、一匹が執念く僕を見て、不都合だと言はぬばかりに首を動かして居るので、僕は思はず「どうも止むを得ない譯なのです。自分のものにするツて盗んだンではないンです。」と泣き／＼言譯をした。すると、その牛は鼻から、息を雲のやうに吐いて、尾を一振りさせて後足を蹴上げて、姿を消してしまつた。

もう漸々河へ差し掛つて來た。僕は随分早く歩

くのではあつたが、どうも濕氣が浸み込んで、足が少しも暖らなかつた。僕は、砲臺へ行く路は知つて居た。ある日曜に、ジョーと其處へ行つた事があつて、其時ジョーは、古い大砲の上に腰を下ろして、僕に話すに「今に御前が眞實に己の小僧になつたら、其時は此處へ来て面白く遊ぼうよ」と。今日は、霧の爲に少し右の方へ行き過ぎてしまつたから、河端に沿うて後戻りをしなくてはならなくなつた。それで、骨を折つて、小石だらけの路を踏み締め／＼歩いて溝を一つ渡り越して、もうこの先が砲臺だと思つて、溝の先の土手を這ひ登つて見ると、例の男が目の前に居る。僕の方へ脊を向けて、腕を組んで、さも眠さうに前に倒りかけてゐた。

僕はその男が、思ひも掛けず、急に食物が手に入つた方が、一層嬉しがるだらうと思つて、そつと進んで行つて、肩の處を觸れたところが、その男は飛び上つて僕を見た。……其男は別の人であ

つた!

が、やはり粗末な鼠色の服を着て、足に鎖が着いて、跛で聲が涸れて寒さうな様子は昨夜の男と同じで、唯顔が違ふのと、平ツたい鍔廣の帽子を被ぶつて居るのが相違してゐた。この男は、怒つて僕を一つ打つた。が力の入らぬ弱い打ち方で、しかも狙ひが外れたので自分が釣合を失つて躓き仆れてしまつた。——其から彼は身を起こして一目散に霧の中へ逃げ込んだが、二度ばかり仆れさうになつて、やがて見えなくなつた。あの若い方の男だ!」と僕は思つて、胸がどきとしました。

僕は砲臺に到着して見ると、昨夜の男が居た。

やはり身を竦めて跛を引いて僕の來るのを夜通し待つて居つたかと思えた。僕はこの男が寒さに堪へ兼ねて、仆れて死にはせぬかと思つた。而してその眼が如何にも餓ゑきつて居て、僕が盥を渡したらば其を食物かと思つて口へ入れさうな氣色であつた。併し、今日は僕を逆様に吊り下げもせず

僕が包みを開たなり、衣囊の中のものを取出したりする間、僕を自由にして置いてくれた。

「其瓶に何が入つて居るのだ。」と彼は問ふた。

「ブランデーです。」と僕は答へた。

と言ふ間に彼は潰肉を咽喉へ押し込んで居た。

其様子が食べてゐるといふよりも、大急ぎで物を仕舞つて居るといつた風であつた。少し經つて彼はブランデーを飲まうと、食べる手を休めた。併し身體がガタ／＼慄へてゐて、酒瓶を齒で噛み合せないやうにするのが大骨折であつた。

「貴君は瘡を病んでゐるんでせう。」と僕は尋ねた。

「大方さうだらうよ。」

「この土地は悪いンです。あなたこの沼地に寝てゐた爲で……沼地に居ると瘡りに罹るのですよ。あなたレウマチスもあるのですね。」と僕は語つた。

「まあ死なない内に、早く飯を食つて置くのだ。」

食つてしまふと直ぐに、ソレあすこのあの絞首  
臺に吊り下げると言はれても構はない。何しろ  
この慄えるのを止めなくては……」

と言ひ／＼彼は刻み肉も、骨片も、バンも、乾  
酪も肉饅頭も一齊に頬張つた。而して、心配さう  
に四方八方霧の中へ目を配つて、時には嚙むのを  
止めて物音に耳を澄した。すると、河の方でカチ  
ンと音がしたのか、沼地にゐる牛の鼻息がしたの  
か、何だかよく分らないのであるが、彼はハツと  
驚いて急に僕に向つて、

「貴様は己を欺すのではあるまいな！誰も一所  
に連れて來たのではなからう？」

「いゝえ。」  
「後から來いと、人に智慧を付けもしなかつた  
らうな。」

「いゝえ。」  
「ウン、よし貴様は虚言は言ふまいから。もし  
もだな、貴様位な年で居て、己のやうなこんな

呼吸をする場所もないやうに、追ひ詰められて  
ゐる不幸な人間を探し出すやうな慘酷な事をす  
るなら、貴様は随分恐ろしい奴なんだがな。」

といつたと思ふと、彼男の咽喉が丁度時計がい  
よ／＼鳴る前にカチツ……と音をさせるやうにカ  
チツ！と音がして、彼は破れ布子の袖を眼に押し  
當て、泣いた。僕は彼の心細げなのに哀を催しな  
がら、彼が再び饅頭を食べ始めるのを眺めて、思  
ひきつて、

「美味しさうに食べますね。」と言つた。

「何か言つたのか。」

「美味しさうですな」といつたのです。」

「さうさ。美味しいな。」

僕は、うちの犬が物を食べるのをよく見守つた  
事があるが、此人と犬と、食べ方が似てゐるなと  
思つた。急に、ひどく食ひ着いて、グツと嚙み込  
んでしまふ處や、誰か横合から饅頭を奪ひ取りは  
せぬかとのやうに、キヨロ／＼見廻す工合など、

どうも犬をつくりであつた。あれでは、どうも食べても身になるまいと僕は思つた。何か話し掛けは悪いが知らんとも案じながら、僕は、

「ちつともあの人に殘して置いてやらないんですか。もう、此上に僕は持つて來られないんです。」と言つた。

「殘して置いてやる？ 誰に？」と男は咬み碎くのを止めて問ひ返した。

「あの若い人の事！ あなたが話したでせう、あなたと一所に隠れて居るといつた……」

「ウン！ あれか！ 彼の男の事か！ あれは食物は不用いのだ。」と笑聲めく音を出して、彼は答へた。

「だつてお腹が減つて居るやうでしたよ。」

彼男は再び食べるのを中止して、呆れながらも僕を孔の明く程熟視して、

「あれに遇つた？ 何時？」

「唯たッ今。」

「何處で？」

「向ふの方で」と指さしをして「居眠をして居ましたよ。僕はあなたかと思つたのです。」

彼は、急に僕の頸元を引摺んで僕を瞰だらみ付けたから又僕を殺したくなかつたのかと思つてブルブル震へながら、僕は、

「あなた見たやうな風體で、唯帽子は被ぶつて居ました。而して……而してね」と、僕は彼の氣に觸らぬやうに言はうと思ふので「あの、やつぱり鑪を借りたいと思ひさうな譯もありましたよ。昨夜、鐵砲が聞えたでせう。」

「ではやつぱり鐵砲だつたのか……」

「どうしてあなたに明瞭鐵砲と思へなかつたのでせう。僕等の家で聞こえましたよ、こゝから随分離れてゐて御まけに戸が閉め切つてあつたんですが。」

「それは、かう言ふ譯だ、な、お前、こんな淋しい處に獨りで居てさ、寒くて饑ひもしくて氣が少

し變になつてゐるから、夜中鐵砲の音がして、

人聲が聞こえるのさ。いや聞こえるばかりか、兵隊が赤い服で炬火を點して、己のまはりから押取り圍んで來るのまで見えるもの。鐵砲の音と來たら、夜が明けてからでもまだ大砲の音が霧の中でドン／＼して居るやうな氣持さ。」と僕の居るのも忘れてゐるらしく、獨語して居たが「その男に、何か貴様の目についた事があつたか。」

「何だか顔に擦り傷がありました。」と氣にも止めて居なかつた事を、思ひ出して答へた。

「此處にか。」と男は掌で、自分の左の頬をピツシヤリ敲いた。

「え、そこ。」

「その男は何處に居る。」と言ひながら彼は食べ残りの食物を懷中に拗込んで「どつちへ行つたか、方角を教へて呉れ!」どんな事をしても探し出してくれるぞ、エツ! 此鎖が邪魔になる

! オイ鑪を貸せ。」

僕は、も一人の男の姿の霧に見えなくなつた方角を知らせてやつたところが、此男は一寸立停つてその方を眺めて居たが、やがて濡れてゐる草の上にとかと坐つて、狂氣したやうに鎖に鑪をかけた。僕の居る事も忘れ、自分の足が擦り剥けて出血してゐるのも忘れて木片か何ぞのやうに手荒く扱つてゐた。彼がかう夢中になると、怖くもあり又一方にはあんまり家を長く明けてゐるのも氣掛りなので、僕はもう歸りますと挨拶したが、彼は氣も付かぬらしいので、黙つて抜けて出るが得策だとソツと立ち戻つた。途中で振り返つて見た時には、彼はやはり首を膝の邊へ下げて、せつせ／＼と鑪を使つて居た。

\* \* \* \* \*

僕は、家の臺所に警官が僕を召捕りに來て、待つて居る事と思ひ込んで居た。併し、實際には、警官も居らず、食物の紛失も、未だ知られずに居

た。姉さんは、今日の御祝の支度に、忙しがつて働いてゐると、ジョーは掃除の邪魔になるとて、臺所の入口の階段の處に追ひ立てられて居た。僕の姿を見付けて、姉は、

「御前はまあ何處に行つて居た？」とクリスマスの御祝儀のかはりにさう言つた。

「御寺の頌歌を聴きに行つたんです。」と僕は答へた。

「さうかい。まあそんなら宜い。……私だつて鍛冶屋の家内でなくてさ、前掛を年中外もしないやうな境遇でなければ、頌歌を聴きに行くのだけれど……頌歌は私や、好きな方なのだが、好きな爲で、やつぱりついぞ聴かれないのかも知れない！」

ジョーは掃除が終はるとすぐ僕と共に臺所へ入つて来て、妻の目を盗んで、左右の人指を十字形に組んで見せて、姉は機嫌が悪いのだといふ意味を知らせた。

今日は、午餐に御客を招いて、珍らしい御馳走の種々をするのであるから、朝食は平常のやうな事はしてゐられないと言はれて、ジョーと僕は牛乳やら、パンやらを無造作にあてがはれて、それをソコソコに食べるのであつた。姉は、用が澤山あつて、御寺の禮拜式には出られないからジョーと僕とがその代理に、衣裳を改め、二人で窮屈がつて出席した。

歸宅して見たらば、食卓の用意が萬端出来て、姉さんも着物を換へ、玄關の戸が御客を迎へ顔に緋りが外してあつた。未だ一言も物の紛失した噂は出なかつた。三四人の招かれた御客が来て、いよく食事が始まつた。僕は、假にあの泥棒一件がなくても、一座の中で甚だ居心地が悪いのであつた。僕は食卓の角の處に座らされて、隣席の客の腕で押されるし、食事中物を言ふ事は禁せられてゐるし、鶏肉や豚肉の一番厭な不味の處をあてがはれるのであるものを！併し其は辛抱すると



しても尙厭な事は、人が僕を打捨つて置いて呉れず、話の題を時々僕の上に持つて来て、いろいろの事を言ふその一事であつた。一寸した例が、食事の際に「どうか一同感謝の心を持つてこれを食べるやうに」との祈りがすむと、直ぐ、姉は僕を見て、小聲で、

「今のが聞こえたかい。有難いと思ふのですよ。」

といふと、ジョーの伯父に當る人が、後を引受けて、

「殊に、御前のやうな、姉の手で育つた者は、尙更の事だ。」といふ。するとハツブルといふ人の家内が、

「何故子供ツてものは感謝の念が薄いうすでせう。」と不思議さうに言ふ。暫時してその良人が、

「生來、悪い性質なものだね。」との斷定を下したので、一同「尤も」と同意して、忌々し氣に僕を見るのであつた。ジョーの家に於ける勢

力は、御客がある時は尙更皆無であつた。から、僕を感めて呉れる方法としては、掛け汁ケレ汁を僕の皿へ入れ足して呉れるより外にないので、今日も一合位僕の肉の上へ掛け添へてくれた。

話が朝の御説教の題の選び方が適當でないといふ事に移つて、「少し目を明けて考へれば、捉へて題とするのに好い材料が澤山ある。此の目の前にある豚肉だつて、宜い例だ。」と甲の客がいふと、

乙が「さうとも。子供の利益ためになる説教が出来ると。」合槌を打つ。姉は早速に「よく聽いて御出で！」と直接僕にいふ。ジョーは、掛け汁をまた入れて呉れた。乙の客が又「豚は食を貪るといふ點についても、子供への見せしめになる。貪り食ふ豚が厭はしいやうに、貪り食ふ子供も厭はしい。」などと肉指フキクを僕に突きつけて言ふのであつた。こんな工合で僕は随分居堪たまれないと思つたが、御馳走の數が順に出て、いよ／＼豚肉の饅頭の出る番が來た。僕は食卓の脚を固く握つて、終

生の友だちでもあるやうにそれを胸の邊に押當て、もうこれが運の盡きだと思つた。姉は上機嫌で御客に向つて、

「これから皆さん、伯父さんの御土産を、最後に召上つて下さい。」と言つて、席を立ち「饅頭ゴウトウなのです。豚肉のですね……。」といつた。

一座の客は相當の挨拶をした。姉は其を取りに立ち去つた。甲の客は、ナイフを指に載せて秤のやうにしてゐた。乙の客は「豚饅頭は如何な御馳走のあとでも亦格別なものだ。」と云ひジョーは「ピッツや、御前にも上げるよ。」と僕に言つて呉れたらしい。僕は其時堪らなくなつて、實際、大聲を出したか、それとも出したと想像したのか分らないが、食卓の脚を放して、一目散に逃げ出した。家の入口まで走り着いた途端に、僕は小銃を持つた一群の兵士に、ハタと行き當つた。一人の兵は、手銃を僕に差しつけて、

「オイ此處だ！ 皆來い。氣を付けて。」

と言つた。

(續)

#### 學年末に

幼稚園に學年末といふ語は當らないが、假にさう言ふとして、兎に角く三月になると、何となく忙しくなる。修了幼児に關すること、新入幼児に關すること、過ぎた一年間の仕事の整理、來る二年間の仕事の準備、何といつても忙しい、しかし、それは事務の忙しさであつて教育の忙しさではない。事務には忙閑いろ／＼の時があつても、教育にそんなことは決してない。あるべき筈でないし、又決してあらしむべき筈でない。すなはち、いろ／＼忙しいので教育がつい留守になるといふ様のことは、何の意味をもなさないことであるし、又幼児に對して、此の上もなく濟まないことである。

かなしきは兒等の心になりもえて兒等にまじりてまゝ、  
ことをする  
——(西山しづ子)——

ハ調  $\frac{4}{4}$

う さ ざ

愛知縣岡崎町立幼稚園

|      |           |          |          |           |           |          |
|------|-----------|----------|----------|-----------|-----------|----------|
| 3-21 | 2 1 2 3 0 | 5. 5 3 2 | 1. 1 5 1 | 2 2 5 3 1 | 2 2 3 2 0 | 3. 4 5 3 |
| ウ サギ | ウ サーギ     | オマへの     | カラダハ     | ナゼーサウ     | シローイ      | ユーキノ     |
| ウ さぎ | うさーぎ      | おまへの     | あとあしは    | なせーさう     | ながーい      | まいにち     |
| ウ サギ | ウ サーギ     | オマへの     | ミーミハ     | ナゼーサウ     | ナガーイ      | ミソチノ     |
| ウ さぎ | うさーぎ      | おまへの     | めだまは     | なせーさう     | まるーい      | みんなの     |
| ウ サダ | ウ サーギ     | オマへの     | シツボハ     | ナゼーサウ     | ミダカイ      | アサカラ     |

|          |          |           |          |          |         |          |
|----------|----------|-----------|----------|----------|---------|----------|
| 2. 1 6 6 | 5. 5 1 3 | 2 1 2 3 0 | 5. 5 3 1 | 6. 6 5 3 | 2 - 3 5 | 3. 2 1 0 |
| ナカデモ     | ゲシキヲ     | ダシエテ      | ビヨソビヨソ   | ビヨソビヨソ   | ハ       | ネマハール    |
| まいにち     | かげこの     | けいこ       | とんとん     | とんとん     | か       | けまはーる    |
| ハナシガ     | キキタイ     | タヌーニ      | キヨロキヨロ   | キヨロキヨロ   | キ       | キマハール    |
| あそびが     | あそびたい    | たぬーに      | あちこち     | あちこち     | み       | たまはーる    |
| バソマデ     | カケマハ     | ルノーニ      | ナーガイ     | シツボハ     | シ       | ヤマニナル    |

第二の歌(アトアシハ)の所は 11151 とし 第四の歌の(ミタキタリ)の所は 55513 とし

三、リーベンスタインに於けるヂーステルウエヒとフレーベル

一八四九年の七月、ヂーステルウエヒがリーベ

ンスタインに來ました、私はこの昔からの友に挨拶を濟ませると直ぐフレーベルのことに私がフレーベルと懇意にしてゐることを話して聞かせました、而してフレーベルが「馬鹿爺さん」と渾名されてゐることを話すと彼は心ゆくばかりに笑ひました。「明朝是非私と共にフレーベルの教室へ同道なさつてフレーベルと相識ちかづきにおなりなさい」と私は言ひました。

「イヤ御免を蒙りませう、愚にも附かぬ教育法は有難くありませんから」と彼は答へました。

けれども私が決して「愚にも附かぬもの」ではないことを極力説明しましたら彼は翌日百姓家なるフレーベルの住居を私と共に訪れることを承諾し

ました。

授業は既に始つてゐました、而してフレーベルは彼の主題に非常に熱心になつて居りましたので背後の開け放たれた戸口から私とヂーステルウエヒの入つて行つたのを例の如く氣が附かずに居ました。ヂーステルウエヒは初めの内は皮肉な面色をして聞いてゐましたが漸次この表情が消え去つて行くと共に今度は非常な熱心が彼の面おもてに現れて來ました、而して彼は遂に感激の餘り涙をはふり落おとすやうになりました、凡そヂーステルウエヒを知る程の人は誰でも彼が平常の出來事に對してこれまで涙などを流したことがないといふことは等しく認むる所であります。

フレーベルが彼の課業を終つた時私がヂーステ

ルウエヒをフレーベルに紹介しますと、ヂーステルウエヒは眞實籠めてフレーベルと相對しました。

フレーベルは非常に悦びました、何故ならば彼は彼の説に對してヂーステルウエヒが前々から贊同の意を現してゐないといふことを聞き及んでゐたからであります、二人はこの初對面に於て既にお互ひに慕しく感じたやうでありました。フレーベルは熱心に而して又例になく明確に彼の思想を開陳しました、二人はあまり夢中に話してゐましたので晝食時が來たのをも知りませんでした、私はヂーステルウエヒに今日はもうこれで引取るやうにと注意しました。

歸りの途に於てもヂーステルウエヒは時々立停つてフレーベルの所説に殊の外満足してゐる旨を私に話しました。私は彼の言々句々にすべてのけだかきものを慕ふ彼の心が如何に強く感激させられたかといふことを思ひました。

「あの人にはまつたく豫言者らしいところがあ

ります」と彼は叫びました、「彼は子供の至奥の天性を看取します、この事はこれまで誰も行つたことはありません、私はまつたく彼に惹付けられてしまひました」

「さうです、彼は誰にでも眞實と人生の福利とに對する至純なる熱情を起させます」と私は答へました。

その時以來殆んど毎朝ヂーステルウエヒは「ムッター ウンド コーゼ リーデル」を持つて私の窓の下に來て「マーレンホルツの奥さん、もう學校が始りますよ」と呼ぶやうになりました。それから機會の許すかぎり私達は午後に於てフレーベルと共に散歩をしてアイディア又はその他の問題に就て意見を交換しました。天氣の悪い日にはこの二人の教育者は大抵私の家へ來ました、而して私達は如何にして新しき教育法を更に押進むべきかといふことに就て考へるべく評議をしました。ヂーステルウエヒは彼の「ウエヒ、ワイゼル」

のために私に序文を求めましたので私は二日の後に彼にそれを與へました、太した値打もないものでしたがフレーベルは熟讀して涙を流しました。

或る夕、私達が會合してゐる時、ヂーステルウエヒはゲーテ基金の計畫に關して伯林からの手紙を受取りました。ゲーテ基金といふのはその年（一八四九年）の八月二十八日のゲーテ第百回誕生紀念の日から起される筈になつて居たのであります、而してこの目的のために各市に於て委員が選定されてゐたのであります。ヂーステルウエヒは伯林委員會の一員でありました、而して彼は私達にこの基金の目的に對して如何に多くの意見が區々であるかを話しました。私は天才致養のための學校の設立を提起しました、何故ならばゲーテの記念のためには人類に於ける天才の力の無拘束といふことが一番よき寄進物であるからであります。

最初ヂーステルウエヒは笑つて居りましたが暫

時考へた後「それも悪い考ぢやありません、今の所では一般民衆の向上を圖るべきです、さうすれば藝術も共に高められて行きます、若き藝術家に對しての贈與金に就ては既に提起されて居ります」と彼は言ひました。

私達は尙その事に就て意見を換して居りました初めの内はまつたく黙つてゐたフレーベルは議論が進むにつれて漸々熱して來ました、而して遂に口を入れて「マーレンホルツの奥さん、あなたワイマルの大公に我々の思惑をお説き込み下さつたら如何でせうか、大公はワイマル委員會の名譽總裁として大變重きをなしてゐらつしやいます」と言ひました。

私はこの委托を果すことを約しました、而して常に善美なるものを求めて歇まない公子に贊同者を獲ました、間もなく大公もイダ女公もアマリア王女も贊成して下さいました、それから其他のワイマルの貴族も私達の計畫に興味を持たれました

私達の計畫といふのはゲーテ基金を以て或る學校を設立しやうといふのであります、その學校といふのは幼稚園に於て高き藝術的天分を現す兒童にその賦與せられた藝術の完全な教育を授ける爲めなのであります。

ゲーテルウエヒは「ゲーテ基金」と題する小論文を私は「徵召」と題する小論文をそれ／＼綴つて私達の計畫に一般からの賛同を得べく新聞に寄せました。

ゲーテルウエヒはその論文の中で次の如く述べました。

「吾人はこの機關を一般的人類の教養並びに特に藝術のために設けんと欲するなり、ゲーテを恥めざる機關は獨創的にして而かも生産的ならざるべからず、即ちそは人類をして藝術の分野に新しき創造を齎すべき生産的なるものたらしむべきものならざるべからず」

それから又次のやうなことも言つて居ります。

「既有的の枯渴せる思想及びこれまで時代を追うて益々甚しきに至れる智識的服従を全然退け去り再び人が人自身の教師たり教育者たることは極めて緊要なる事ならずや」

「ベスタロツチが彼の生涯を通じて努力せる所のもの——家族生活の不可犯性の挽回、教育的天職を全うせしむべく母を教導くこと、人類の教育者に對して相當の意見を抱懷し能ふやうに一般女子を師導して教養すること——以上は彼が完成せる所のものにして彼は以上の努力のために實際的手段を悟得することを得たり」云々

是等の文章を見てもゲーテルウエヒが如何にフレーベル及び彼の主張を理解してゐるかを知ることが出來ます。フレーベルも亦この新聞に次の數行を附加へました——

「理想的なる藝術はそれ自身が目的なれども教育の手段となることに依てその價值を卑しくせらるゝものにあらざることを吾人は茲に力説せんと

す、嘗に獨逸國民のみならず人間種族が完全なる生活に高められ藝術を鑑賞し並びに製作するに至らば豊富なる創造力の權化たる藝術は人類を創造的なるものとして思索し取扱ふことを根本的思想とせる教育的組織に依つて保護せられざるべからず茲を以て吾人はこの教育的組織をゲーテ基金の對稱となすに躊躇せざるものなり」

この目的は長い間私達を専有して居りました、而して幾分か有望らしい兆候が見えて居りましたしかしこの事は竟に達せられずに終りました。

各委員會の多數の人々はワイマルの大公及びベルリンのヂーステルウエヒによつてなされたる提案を承認し且つ之を有効的に支持すべく餘りに僅少の智識をフリーベルの教育法に對して有してゐたのであります。決定的なる多數者は斯る場合には反對しました、理想的な目的といふものは少數者を除いては理解されないものでありますから是等の多數者は智識的利益のためには無慘にも多大

な妨げをなすのであります。

八月の下旬にヂーステルウエヒと私はワイマル女公の招待によつてゲーテの第百回誕生紀念を祝することゝなりました、而して決議が既に果たされてしまつたことを知りました、ゲーテ基金として集められた金は活計に苦しむ若き藝術家へ補助金として贈與せられました。ワイマルのリスツの勢力でこの贈與は殊に音樂家の上に及ぼされたのであります。エツテルスブルグの大公の城内でリスツと會見して私は彼の意見に反抗したのでありますでしたがそれは役に立ちませんでした。リスツは何遍も「天才がいくら苦しんでゐても人々は助けやうとしません」といふ言葉を繰返しました。その後私は彼にフリーベルの教育法の重要なことを悟らせることが出来ました、彼はその時幼稚園のために唱歌を作ること約しましたが未だにこの約束は果たされません。

これまで幾度も頼みにしてゐたことの失望に終



つた經驗を嘗め來つたフレーベルは私達の計畫の手違ひになつたことに關して彼自身を如何に慰むべきかを知つて居りました。希望が成就せられて悦ぶといふことの外に彼は既に七月に私達に次のことを悦ばしげに告げ知らせたのであります。それは彼の許に停つて彼の家政及び學校の事務を何時までも掌るべく彼のカイルハウ時代の初期の生徒の一人(フロイライン、レピン)が來ることになつてゐるといふことであります。間もなく彼女は到着しました、而して(フレーベルの言ふ所に從へば)彼女は彼の學校に家族生活の滋味を加へました、フレーベルは家族生活といふことを教育機關に取つて非常に重大なものであると考へてゐるのであります。

フレーベルは眞に父らしき愛を以てすべての彼の兒童を愛しました、兒童は又フレーベルに對して絶大な愛と感謝の念とを懷いて居りました。學校内に於けるこの情愛深き關係はマリエンタール

に行く者を誰でも心よく思はせました、而して關係の薄いものにも同情の念を喚び起させました、而してこの同情の念はリーベンスタインの美しき四周を共に散歩することによつて愈々強められるのであります。

或る時私がフレーベルに如何に深く私が私達の周圍に見出すことの出來るこの家族的感情を味ふかといふことを話した時に彼は「さうです、それは私達を結び付ける思想があるところにのみ可能であります、思想のみが私達を精神的に一體とすることが出來るのであります、」と言ひました。

彼はこれを私達が彼の兒童及びヂーステルウエヒと共にインセルスベルヒへ馬車を驅つた時に車の内で言つたのであります、私達は夜になるまで歸りませんでした、日が全く暮れてしまつてから又馬車に乗つて歸りました、よく晴れた星空はフレーベルを誘つて彼の生徒に星座を指示させ又私達の頭上に輝いてゐる世界の體系に就て話させま

した。彼は他のことを云つた序でに次のやうなことを言ひました。

「蒼空は聊かでもあれば私達にすべての實在の結合を認めさせます、而して私達を渾一——神にまで導いて行きます、天體の内には孤立してゐるものは一つもありません、すべての遊星はその系統に屬する恆星を中心として居ります。すべての太陽系統は互に關係を有し又絶えず互に作用してゐるものであります。これこそすべての生活の條件であります、何處にも各部分の相互作用は存在します。天なる星の間に破れざる結合と調和が支配してゐると同じやうに下なる大地の上に於ても如何なる小さな事にまでもこの法則のあらはれを見ること出来ます、何處にも同じ秩序と調和とがあります、何故ならば同一の法則があらゆる所を支配してゐるからであります、神の一の法則、それはあらゆる形を取つて現れてゐますが究局の解剖に於ては一となるのであります、何故ならば

神はそれ自身が法則であるからであります。天體は砂粒のやうに組織されて居ります——大宇宙と小宇宙とは互に相一致します、兩方とも組織せられたる全體であります、けれども組織は最も單純なものより最も複雑なものに至るすべてを支配します、神の創造せるあらゆる方面。現象の無限なる種々相に於て私達は常に統一に出會ひます、而して私達はそれから推して私達の知覺しない所までも悟らなければなりません、渾一が持續されなければ破れざる結合は不可能であります」

デーステルウエヒは茲で一寸口を入れました  
「それは萬有神教と人々が呼ぶものです」  
フレーベルは答へて言ひました。

「がそれは間違つてゐます。萬有神教の見解は成長しすぎてゐます、而して私達は分つべからざる渾一には最早何等の關係もありませんが三位一體に就ては考ふべきであります、三位一體は分らないといふ理由の下に人々が拒む所の隅石となり

ました。神の三部統一は見ることの出来る眼には神のすべての作物の中に明白であります。私達は常に又あらゆる方面に於て兩極とその中間物との三位一體トリニテイを持たないでありませうか。而して又何處にか又如何にしてかその中間物並びに渾一を伴はざる兩極が何處に存在しませうぞ。あらゆる方面に現れてゐる是等の兩極は宇宙若しくは最も小なる組織(作用と反作用)に於けるすべての運動の原因であります。かるが故にすべての進展には闘争を必要とします。しかしこれは遅かれ早かれ平衡を得なければなりません、この平衡は全體のすべての部分に調和若しくは一致を作るべき兩極の中間物であります。調和はすべての組織の花時であります、これは智識の世界にも物質的世界にも見出さるのであります。すべての植物は私達に兩極の結合——內的と外的、力と物質、原因と作業、可見と不可見等を語つてゐるではありませんか。けれども私は萬有神教論者の如く世界は神の

體で神は宛も家に住む如くその内に住むとは言ひません。けれども神の心は自然の中に住とどつて生息しすべての物を普通の生活原理として産出し養成し開陳するのであります、同じやうに又神の心は神の作物の中に住つてそれを産出し養成し保存するのであります。藝術家の心が彼の傑作に於て再び見出されるやうに私達は神の作物に於て神の心を看取しなければなりません。

私達はその作物の中なる造物主を知ることが出来るやうに私達の子供の眼を開いてやらなければなりません、子供達は可見的事物を通して造物主としての神を發見し推察する時に於てのみ彼等は神といふ言葉——心靈の神、誠の神——を理解するやうになり又基督教信者ともなることが出来るのであります。最初は可見の世界であります、次に不可見の眞理——アイデアであります。可見の兩極は幼兒のためには言語によつてなく現象によつてのみ結合せらるべきであります。そ

れは最初は幼児にその印象を與ふるに止ります。

私の「ムツター ウンド コーゼ リーデル」はこの事のなされ得ることを示して居ります。夫等の歌を通して母親達は子供の心靈が如何にして早くから眞理の知覺のために準備せられ得るかということを學びます。少年時代に於ける宗教的準備なくしては眞の宗教も神との合一も人に取つて不可能であります。神を信ずるといふことはすべての人、すべての子供の先天性であります。たゞそれは正しく覺醒されなければならぬのであります、すけれどもそれは覺醒されなければなりません、然らざればそれは何時までも生氣を持ちません。斯ういふ調子で私達は長い間話をしました、而してフレーベルの云つたすべてのことから深き神の信仰と眞摯なる宗教的の心が輝きました。彼は常套的な兒童の宗教教育に殆んど賛同してゐませんでした。けれども彼はその意に充たざる宗教教育に代ふべき彼自身の考案に係る何物を有し

てゐました。

フレーベルに何故彼が樹木を選んで智識的世界の組織と進展の普遍的過程を表象したかといふことを尋ねますと彼は次の如く答へました。

「組織的生活とその諸部分の相互關係を現すものを自然界に求むるに樹木に若くものはありませぬ。種子(渾一)は萌芽に於て二部に分れます、而して進展のすべての階段は完全に達するまで定められた通りに明瞭に續きます、根と葉團とは反對の同格物であります、何故ならば大地に植ゑられた葉團は日光を欠くが故に根となります、そり返つて地上に現れ日光に曝された根は葉團と變じます。樹木に於ける是等の二つの關係せる二つの反對は幹によつて結合されて居ります、幹はその内に木質の根の要素と葉團全體に分布さるべき活力を含んで居ります。織枝と葉の連結に於て私達はすべての連結、大小の枝と織枝、これに結合されてこれからその生命を得て居る葉の塊りに至るま

でが連結の典型をなして居ります。

同様にして人間社會の必然的連結も國家の組織も表現せられて居ります。至小より至大に至るすべての部分に現れてゐる渾一は樹木にその個性を與へます。例へば菩提樹の匂ひに特有な甘美は葉の色にも幹及び根の撓性にも再びこれを求むることが出來ます。すべての部分は皆同一の特質を示して居ります。花も葉も等しくある特質を語つて居るのであります。之に反して榧はこれと反對な性質を示して居ります。榧のすべては力と集中とを語つて居ります。——節くれ立つた根も幹の皮も堅緻な木質も硬ばつた葉も舌を刺すやうな味のある果實もすべて上に述べた性質のあらはれを持つて居ります。菩提樹も榧も樹木の普遍性に於て變りはありませんが各はその様式即ち特有性に於て分れて居るのであります。

茲に於て私達は(すべての部分に共通な)渾一と(部分の不同に於ける)變化と(樹木の特有性を現

してゐる)固有とは樹木の現象に於て結び合されて居り又明かに現されて居るといふことを感ずるのであります。それですから樹木は自然的<sup>シムボット</sup>生活、智識的生活即ちすべての組織の明瞭な表象<sup>シムボット</sup>なのであります。キリストも亦「ゼ、ツリー、オブ、ヒエウマニチイ」といふ言葉に於て人生を樹木に擬へました。

フレーベルの思想及び理論の深い方面は偶<sup>たま</sup>から引き出されます。けれども彼がその教育的理想を置いてゐる所の彼の世界觀の原理に觸れるときは直ちに彼の表現と彼の形式は彼が私に送つた手紙に書き示した如くに非常に明晰となります。彼は又基督教及びその深遠なる教義の上に如何にして己を明かに現すべきかといふことを知つてゐました。彼はその教育的理想の適用及びそれを實際生活に應用することに關しては彼自身をてきぱきと處することは出來ませんでした。何故ならば彼はそれを無數の迂曲を盡して行はんとしたからで

あります。このことに對する一つの理由は彼の心が彼のなし遂げることの出来なかつた仕事——それを完成させるためには多くの生命と多くの年月とを要する仕事に全部惹き寄せられてゐたといふ事實に存するのであります。もう一つの理由としては彼は老人の説を正しく理解してゐてそれを彼一流の話調の中へ捉へ來つて幾度も繰返し同じことを種々な言ひ現し方によつて現さうとしたために却つて彼の望んでゐた明晰といふことの反對が結果として現れたのでありませう。主としてこの理由からフレーベルの書いたものは不分明であり又一般を通じて讀まれないのであります。これと同時に新しい思想や新しい理論といふものは誰にでも同じやうに了解されるやうにすることは不可能であるといふことが記憶されねばなりません。ヂーステルウエヒさへもフレーベルの考の分らなかつたことは屢々あります、けれどもこの偉大なる教育者は他の者の如く自分に分らない所があ

るの故を以てフレーベルの主張を否定したり又之を捨て去つたりするやうなことはありませんでした、彼は屢々私に言ひました、「フレーベルの思想に就て私の理解してゐる所のものが私をしてあるものをそのものが少ししか成し遂げられてゐないといふ故を以て排斥してはいけないといふことを悟らしめてくれます、フレーベルの主題には未だなさるべき多くの事柄があります。既に實際的適用のために準備せられた材料は優れたものであります、それにはフレーベルの思想が明かに現されて居ります。それは尙進んでフレーベルとベスタロッチが相會ふ學校にならなければなりません。時として私がヂーステルウエヒに彼の著作に於てフレーベル教育法の適用を説明すべくもつと深くフレーベル教育法を研究なさいと勧めますと彼は次の如く答へます。「それは他の者のすることとして私のすることではありません、私は學校當事者としてベスタロッチに關して解くべき問題を有し

て居ります」(誠や彼はその問題を解き去つたのであります)彼は尙言ひます「フレーベルの方法を幼児に實際的に適用するのは女子——母及び嫗姆の任であります、この教育の初歩を掌るべく女子の適任なることは認められてゐる事であります、それから第二段即ちヘスタロッツの學校法を適用すべき時代が來るのであります、けれども私はこの事を行ふには餘り年を取りすぎて居ります、私は既に自分の力以上に澤山の仕事を持つて居ります」

フレーベルとヂーステルウエヒとは外貌が對照をなしてゐたばかりでなく兩人はその心的賜物及び心的賜物の使用法に於て又對照をなして居りました、フレーベルの丈の高い瘦せた身體はヂーステルウエヒの丈の高い肥つた岩丈作りの身體の反對でありました。フレーベルの顔は尖つて角ばつてゐました、ヂーステルウエヒのは圓く肥つて居りました。兩人とも高い鼻をもつてゐましたがフ

レーベルのは殊に高くありました、フレーベルの顔の表情は非常に思索的で自分に惹き入れられてゐるやうな所があります、ヂーステルウエヒのは外界の事物を仔細に觀察しやうといふやうな而して又愉快な表情であります、フレーベルは自己の専門以外に關しては批判的能力を缺いてゐましたがヂーステルウエヒはあらゆる方面に多分の批評眼を具へて居りました、而してこの二つの心は同じ分野に働いて居たのでありますがその方向は甚しく異つて居りました。ヂーステルウエヒは教授法の分野に於て熟達者と認められてゐましたがフレーベルの特に問題としてゐる所は一般に教育といふことであります、全き人の進展といふことであります、而して人格の構成といふことに意を注ぐために行爲と産出とに對する準備といふことを問題として居りました。この目的が人生の初期に於て新しく教育を始めるといふことに重大なことであると彼には考へられたのであります。ヂース

テルウエヒは理解を作るためにベスタロツチと共に努力しましたがフレーベルは寧ろ意志と活動力を作らうと圖りました。ヂーステルウエヒは教育學の分野に於て優れた實際的天才によつてまのあたりの現在に影響感化を及ぼしましたがフレーベルの感化といふものは之を未來に待つ他はありません。フレーベルの如く新しき思想を以て恵れた者は實現せられるには間のある高級な靈感インスピレーションの陽燧であります、而して彼等の仕事は彼等が生涯に於て外的世界に於て大なる權威を持つことが出来るに於て極端に内面的なものであります。尙又フレーベルは發見者でありました、而してすべてのことが外的の適用に對して完備せらるゝまでは黙々として研究してゆかなければならない發見者でありました。

是の二個の偉人が多くの點に於て互に反對ではありましたが彼等は又他の點に於て内的に結び付けられて居りました、二人は共に感情の強い温い

心を懷いた深い獨創性を有して居りました、二人は人類のために働くといふことを自覺してゐました而して全く自己棄權をして一生涯努力し苦闘しました。

私は常にこの二個の高貴な心と優れた人柄とに親交をもつてゐたこと及び彼等の氣高き教育事業に私の關り合つてゐたといふことを得難き幸福であつたと信じて居ります。

親しく其の人に接するか、其の人を最もよく識つて居る人の話を聽くか、此の二つの他に、偉人を學ぶ途はありますまい。私共はフレーベルの許へ馳けて行つて、直接に學び得たらばと思ふことが胸一ぱいにあるのですけれど、それは出来ないことです。たゞし幸に、其の著書や自傳や書翰によつて學ぶことが出来るのですが、どこまで誤りなく、殊にどこまで深く私共に學び得るかといふことは、自分ながら危ぶまれます。此の時誰れかフレーベルを最もよく識つて居る人が欲しくなります。併し、フレーベルをよく識つて居るといふ人々殊に學者からは、此の偉人に對する理解の正しさは充分與へられても、理解の深さに於て物足りないことが往々あります。——私は、さういふ時に、何よりの書として、此のビュウロウ夫人の「フレーベル追懷録」のあることを嬉しくも有り難くも思はれてなりません。（倉橋生）



幹主子とも仁羽

# 子供之友

婦人之友社が年來の宿志によつて、昨年四月から出して居ります十分教育的なる子供雑誌で御座います。記事も挿畫も子供の喜ぶものばかりです。楽しんで讀む間に、頭腦をよくし感情を高尙にし、善良なる習慣を愛するやうになります。『子供之友』には、一つの非教育的なる挿畫も、一行の不注意なる文章もありません。『子供之友』は、家庭教育の最も有力なる補助機關であります。幼稚園及び小學校時代の御子様方のために、熱心によき讀物を求めて居らるゝ御家庭におすゝめ致します。

定価 十一冊半 税分 六錢 十錢  
 東振替 京一六〇六 社友之人婦  
 谷ケ司雜  
 番〇〇六



# の一本日 年幼本日

## 報畫の供子き白面くし美

文學士 倉橋惣三 先生監修  
繪畫は 六畫伯の執筆

◎可愛いお子様を

美しく善く育てたいと思はれるお母様方の爲めに深い注意と多くの苦心を重ねて理想的に編輯せられ今度新たに生れたのはこの日本幼年です

◎可愛いお子様に

お興へになつて玩具やお菓子よりも喜ばれ面白がつて楽しむ間に感情を高尙にし美しき習慣を養ひ清き心の糧となるのはこの日本幼年です

◎可愛いお子様が

幼稚園から尋常小學でお習ひになつたことを喜び笑ひ興する間に知らず識らず復習し補習するのはこの日本幼年です

◎最後にお母様に

御注意を願ふのは日本幼年は文學士倉橋惣三先生の監修で六畫伯の彩筆になり紙数も多く印刷も鮮明で従來有りふれたものに全然超越して居ることです

定價 婦人畫報 一税部一錢  
少女畫報 一税部一錢  
日本幼年 一税部一錢  
◎前金 半年前金六十三錢  
發行所 東京 京社  
東京市京橋區鍛冶橋外 電話東京二一八番

フレイベル會規則 (抄)

第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハフレイベル會ト稱シ東京ニ置ク

第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノトス

第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ獻出スベシ

第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ

第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ

一、總會、毎年十月之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參考品、幼兒成績物展覽、會務ノ報告等ヲナス

一、常會、毎年二月、六月、ノ第二土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス

一、組合會、會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスルモノヲ以テ組織ス

但シ別ニ組合規約ヲ定メテ會長ノ承諾ヲ經ルモノトス

一、雜誌發行、毎月一回雜誌ヲ刊行シテ之ヲ會員ニ配布ス

一、前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

本會幹事

(イロハ順)

中川謙二郎

本會々長

|        |        |        |          |         |        |         |         |         |         |         |         |        |        |        |        |       |        |       |       |
|--------|--------|--------|----------|---------|--------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|--------|--------|--------|--------|-------|--------|-------|-------|
| 菅原 敬造氏 | 東 基 吉氏 | 櫻井 光華氏 | 小西 信八氏   | 松本 孝次郎氏 | 野上 俊夫氏 | 中島 力造氏  | 棚橋 源太郎氏 | 唐澤 光徳氏  | 尾田 信忠氏  | 戸野 周次郎氏 | 波多野貞之助氏 | 伊澤 脩二氏 | 下田 次郎氏 | 野口 幽香氏 | 乙竹 岩造氏 | 小向 きみ | 倉橋 惣三  | 大瀧 晴  | 井村 く  |
| 瀬川 昌耆氏 | 三島 通真氏 | 淺岡 一氏  | 馬 上 孝太郎氏 | 久留島 武彦氏 | 中村 五六氏 | 多田 房之輔氏 | 谷 本 富氏  | 大久保 介壽氏 | 大瀬 甚太郎氏 | 細川 潤次郎氏 | 巖谷 季雄氏  | 日田 權一氏 | 横山 榮次氏 | 吉田 熊次氏 | 雨 森 劍  | 安 井 哲 | 和 田 實  | 池 田 ト | 坂 内 ミ |
| 尺 秀三郎氏 | 篠田 利英氏 | 雀部 顯宜氏 | 富士川 游氏   | 松本 亦太郎氏 | 野尻 精一氏 | 田中 敬一氏  | 高島 平三郎氏 | 嘉納 治五郎氏 | 奥 好 義氏  | 本間 辰藏氏  | 岩谷 英太郎氏 | 藤井 利譽氏 | 田中 ふさ氏 | 坂 井 ふ  | 坂 井 ふ  | 福 田 ふ | 和 田 くら | 坂 内 ミ | 坂 内 ミ |

本會客員

(イロハ順)

本會評議員

(イロハ順)

文學士 河野先生  
米人 マキム先生 指導

# モンテッソリ教具

定價 壹揃  
金貳拾五圓也  
送料 實費

弊館儀上記諸先生の指導を得て夙にモンテッソリ教授用具の製造に着手し爾來數年の研究を経て多大の改良を加へ今や本邦兒童の教具として完全無缺の製品を見るに至れり之れ一ツに熱心なる諸先生の賜にして弊館の大光榮とする處なり大方の諸彦希くは陸續御採用あらんことを

視覺練習其ノ一(形ニ關スルモノ)

- 1. 板 簾 六圓
- 2. 型 板 二圓

## 内

視覺練習其ノ二(ダイメンシヨニ關スルモノ)

- 3. 錘 刺 一圓五錢
- 4. 方 塔 一圓五十錢

## 容

視覺練習其ノ三(色ニ關スルモノ)

- 6. 長 段 七十錢
- 7. 色 糸 盤 二圓
- 觸覺練習ニ關スルモノ

- 8. 粗 滑 盤 二十五錢
- 9. 布 箱 二圓
- 10. 文字 板 一圓三十錢
- 11. 筋覺練習ニ關スルモノ 輕 重 板 一圓三十錢
- 12. 聽覺練習ニ關スルモノ 音 筒 七十錢
- 13. 計數練習ニ關スルモノ 計數 函 一圓四十錢
- 14. 計數 板 六十錢
- 15. 實用練習ニ關スルモノ 布 櫃 三圓

元 造 製

東京九段 フレーベル館 電話替 番東一 町九 二九 〇九 九〇

明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可(毎月一回五日發行)  
婦人と子ども 第十五卷第三號  
大正四年三月十日發行  
大正四年三月十日納本濟

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場